

これを歴史小説と見たならば穩當であらうと思ふ。

物語の他に 消息文 といふ一種の文體が此の期に起つたのは、注意すべき事で、それには、

僧 玄 惠 庭訓往來 遊學往來

藤原定家 定家御消息

藤原良經 新十二月往來

僧師鍊(虎關) 異制庭訓往來

などがある。これには假名を交へず、漢文のみを以て所謂「候文」をものしたものも、假名交り文で今日に行はれるものに近いものもある。徳川時代の武士の用文は、全くこの消息文の系統のものであつた。徳川時代のみならず、明治時代にかけても相當にこの漢字のみの候體が用ゐられたのである。

足利時代の文體は、殊に多様であつて、平安朝式の雅文と候文とがあれば、又他に

口語文——狂言——五山の抄物——などもある。但し今日吾々の用ゐて居る口語は、その源を、多分足利期に發したものであらう。少くとも文献の徵すべきものでは、此の時代以前に遡る事が出来ない。

御伽草子 は鎌倉時代に流行した繪卷物から發達したものであらう。であるから、この草子には必ず繪を挿んで、上流社會の玩物となつたのである。その結構は中古物語に題材をとつて、それを改削したものが多く、

文正草子 二卷

鉢かつぎ 二卷

などが、最も有名になつて居る。文正草子は、常陸國鹽燒の里に住んだ文正といふ賤しい男が、鹿島大明神に祈誓してまうけた二人の娘を中心にして、その娘が貴人の妻となり、父文正も宰相の位に上つて、その家は富み榮えたといふに終つて居る。鉢かつぎの方は、常に鉢をかぶつて居る片輪の女が、繼母に悪まれて世をはかなく暮して

居たが、或機會にその鉢が碎けて、中から金銀財寶があまたあふれ出た。遂に宰相の人に嫁いで、幸福な半生を送つたといふのである。何れも、これといふ新奇の工夫があらはれたのではなく、俗語と佛語とが多いのを特長といふべきであらう。これに類したものに、

淨瑠璃十二段草子

といふのがある。淨瑠璃姫の事を書いたもので、江戸時代の所謂淨瑠璃は、その名をこれに發した。

十一、日記 紀行

これは、鎌倉時代に出たものが多く、室町には、特に擧ぐべきものがない。日記では、

辨内侍日記 中務大輔藤原信實の女

中務内侍日記 宮内卿永經の女

源家長日記 源家長

紀行では、

海道記 源光行

東關紀行 源親行

十六夜日記 藤原爲相の母阿佛尼

が代表的のものである。日記は其の體裁殆ど全く平安朝の風を踏襲したに過ぎない。紀行の方には、却つて平安朝に見る事の出来ない特長と見聞とを發見する。當時政治の中心が鎌倉にあり、また多數の上流社會の人は、京都に住んだ爲に、東西の交通が頻りで、その往復に文學者があつた爲であらう。この三紀行はいづれも東海道——東くだり——の紀行で、これによつて當時の旅行状態が髣髴される。

(一)海道記と東關紀行 海道記は源氏物語の註釋書水源抄の著者源光行の作。また東關紀行はその子親行の著であるといはれて居る。兩書共に京都から鎌倉に下つた紀行

で、いづれも當代に發達した和漢混淆文で記されてあるが、海道記の方に和文派をやゝ多く見、東關紀行はやゝ平易であるとする事が出來よう。

参考書としては

鳥野 幸次

東關紀行詳解

大町 桂川

標註東關紀行

(二)十六夜日記 作者阿佛尼は藤原爲家の後妻、夫爲家の歿後、その遺領播磨國細川の庄を先妻の子爲氏と争ひ、その訴訟のために鎌倉に下つた時の紀行で、京都を出發したのが十六日の夜であつたので此の名がある。前二書とちがつて、これは平安朝風の假名文であるが、しかも行文簡勁、やさしい裡におのづから強い母性愛のあらはれて居るのは、前時代に見られなかつた所である。

箱根路 (十六夜日記)

廿八日。いづの國府をいで、はこねぢにかゝる。いまだ夜深かりければ、

たまくしげ はこねのやまを いそげごも なほあけがたき よこぐものそら

あし柄山はみち遠しにて、箱根路にかゝるなりけり。

ゆかしさよ そなたの雲を そばだて、よそになしぬる あしがらの山

いささかしき山を下る。人の足もさしまりがたし。湯坂ぞいふなる。からうじてこえはてたれば、ふもこにはや河さいふ河あり。まことに早し。木の多く流るゝをいかにさへば、あまのもしほ木を、浦へ出さんにて流すなりさいふ。

あづま路の ゆさかをこえて みわたせば しほぎ流るゝ 早川の水

湯坂より浦にいで、日くれかゝるにさまるべき所遠し。伊豆の大島までみわたさるゝ海づらを、いづこさかいふさへぎ、知りたる人もなし。あまの家のみぞある。

あまのすむ その里の名も しらなみの よするなぎさに 宿やからまし

まり子河さいふ河を、いさくらくてたざりわたる。こよひは酒匂さいふさころにさまる。明日は鎌倉へいるべしさいふなり。

参考書としては

第五章 鎌倉室町時代

小山田與清	十六夜日記殘月抄
關根 正直	十六夜日記庭のをしへ諺解
三木五百枝	十六夜日記講義
佐野保太郎	十六夜日記新釋

十二、戰記文

鎌倉時代に、

保元物語	三 卷
平治物語	三 卷
平家物語	十二卷
源平盛衰記	四十八卷
室町時代に、	
太平記	四十一卷

がある。鎌倉時代の四書はいづれも、源平争闘のあとを記し、太平記は南北朝の戦亂を述べて居る。

(一)保元物語 平治物語 この二書は最初の事件である爲でもあらうが、その戦亂を描く有様、文章や、質實の傾があるが、これ迄、所謂優にやさしい世界のみが描かれて居た所へ、こゝに劍戟の巻が書かれたのであるから、その内容は勇壯活潑、編中の人物は、勇怯、正邪の性情があらはされて、方面は一展開された。また文章としては和漢の故事格言を博く引用して、人物事件を論評するあたり、實に著者の博學が偲ばれる。また現世の成敗を見て過去の業報となし、人智の及ばない事に逢うて、不可思議な神佛の功徳を説くあたりは、一々佛教の影響深く民心に入つて居るのを思はせられる。保元物語に爲朝生捕の場を記して

………その中に十四五人選んで、わざと太刀をば持たせず、浴室の中へ亂れ入り、さうなく搦めやらんす。爲朝少しも騒がず、つみ立て、十人手組して寄る所を、三人搔掴み、押合

ひ、ひしひしめ殺して捨て、前後左右より續いて寄する二人をば擱んで引寄せ、頭を頭で打合はせ、ひしいて投捨て、一人をば湯桁に押當て、首ねじ切つて投出す。或は拳にて胸をつかれ、のけざまに倒れて死す。或は腰の骨踏折られて、這々逃げければ、續いて入る者なし。湯屋の内震動して、男女周章^{あわやう}て迷ひ、走り出づ。さらば湯屋に火懸けて焼殺せこの、しりければ、爲朝湯屋を蹴破りて出でけるが、柱を一本引抜いて打かつぎ走りければ、大勢追ひ來る。立歸つて打殺し、敲き殺し、散々に振舞ひけれ共、重病日數積つて合期ならぬ時分なかりける間、暫しこそ有りけれ、敲手すくみ力弱りて、走り倒れたるを、者共走り寄り、是彼取附く程こそあれ、打重り擱み附く。暫しこそ拳にて打のけたれども次第に力疲れ、心は猛く思へどもおめおめと生捕られけり……………

とあるのは、ほんの一例に過ぎないが、平安朝時代には決して見る事の出來ない事件であり、且つ筆致も頗る異つたものであるのに氣が附くであらう。けれども保元・平治の物語は、こゝに見た文章からいうても、ごうも、平家物語より先に出來たもので

はないやうにも思はれる。今はたゞ疑を存して、他日の研究に待つ事とする。

(二)平家物語 はいふ迄もなく、平安朝末期に起つた源平の争亂を描いたもので、結局平家が西海に落ち行いて、海底の藻屑と化した物語。一篇の悲劇である。作者に就いては、古來いろいろの説もあるが、要するにわからない。勿論佛學の深かつた、或人の筆になつたものであらうが、そのあらはされた思想は、全篇を通じてよく當時の人心を物語つて居り、かつまた、その文調が頗る諷誦に便なものであるから、遂に一種の謠物となつた程で、一面からは、この物語を國民詩と見る事も出來やうと思ふ。ごまかくも文學としては、戦記文中第一位を占むべきである。

壽永の天地を舞臺として、時代の力が生んだこの活歴史は、實に小説よりも奇なるものを演出して、それが沈痛闊達な筆に描かれたのであるから、吾々の感興をそゝるのも、無理がない。描かれた事實は、歴史上空前の事柄である。藤原氏の衰運に乘じて、或一氏がこれを倒したのなら、それ程でも無かつたであらうが、一時平家が立ち

更に源氏が覇を唱へる迄、雨々相對して、互に養ひ來つた潜勢力を一時に活動させたのであるから、多くの悲劇を生じたのはもとより、又そこに勝利者の勇壯もあらはれて、花紅葉の綾を彩つたといふ有様である。

これに加へて、これ迄に隆盛となつた所謂物語——想像の天地を描いた——平和な樂天地を描いた——とは、全然その趣を異したのであるから、事件も文致も、共に吾々の心をそゝるものが多いのである。平家物語は決して純然たる歴史——史實を中心とする——ではない。嘗て平家物語は史實にあらすと論せられた事もあるが、それは當然の事で、作者の想像も勿論交つたことだらうし、傳説の誤つたものもあつただらう、而も一面それが文學的の價値を一層深からしむるのである。

時代が生んだ文學。そして、その時代そのものが、悲惨であるから、これを文學化したものは、更に人の心を引つけるに十分なものがある筈である。まことに清盛の一生こそ、この一篇を通じて、舊社會を覆滅し新社會を樹立せんとしたもので、習慣的

平家物語卷第一
 阿波國文庫
 不忠文庫

并序 四部合戦状第三番翻譯
 祇園精舎之鐘聲有諸行無常怨者感
 羅雙樹花色顯威者必衰理奢人不
 久如春夜之夢武者終滅同風前塵
 遠訪異朝秦趙高漢王莽梁周異處

阿波文庫眞名本卷第一卷頭(國語史料鎌倉時代之部平家物語につきての研究に據る)

勢力——藤原氏の——に反撥して起つた清盛は、徹頭徹尾自己の威力に信頼して、獅子奮迅の大活動を續けたのである。六十餘州は今や、清盛の手に新光明を見んとしたのであつたが、時代の勢力は、一層彼の力よりも優つたものがあつたと見えて、更に再度の争亂を生じて、一門の榮華は春の夜の夢となつて消えたのである。榮枯盛衰、生者必滅——南無阿彌陀佛——と唱へる、佛家の見とこの事件とは、こゝに全く符合したのである。

「祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり」

と平家物語に書き起したのは、實にこの兩者が合した自然の叫であらう。こゝには、一例として「大原御幸」の一段を抄録する。

かゝりし程に法皇(後白河)は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居、御覽せまほしく思召さるれども、二月三月の程は、嵐烈しく餘寒も未だ盡きず。峯の白雪絶えやらで、谷の氷柱も打解けず。かくて春過ぎて夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、大原の

奥へ御幸成る……遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり、青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜まる。卯月二十日餘のこゝなれば、夏草の茂みが末を別け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡絶えたる程も、思し召し知られて哀なり。西の山の麓に、一字の御堂あり。即寂光院是なり。ふるう造り成せる泉水木立、よしある様の所なり。葺破れて霧不斷の香を焚き、扉落ちては月常住の燈を掲ぐも、かようの所をや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の若草波に漂ひ、錦を曝すかこあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うらむらさきに咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇是を御覽ありて斯くぞ遊ばされける。

池水に　みぎはの櫻　散りしきて　波の花こそ　盛なりけれ

古りにける岩の絶間より、落ち來る水の音さへも、ゆるよしある所なり。緑蘿の垣、翠黛の山、繪に書くこも筆に及びがたし。

さて女院の御菴室を御覽あるに、軒には葛、薺這ひ懸り、しのぶ交りの忘草、瓢箪屢空し。草、

顔淵が巷に滋し。藜藿深く銷せり。雨、原憲が樞を濕ほすこもいひつべし。杉の茸目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、洩る月影に争ひて、溜るべしこも見えざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小笹に風騒ぎ、世にたゞぬ身の習きて憂きふし茂き竹柱、都の方の音づれば、間遠に結へるませ垣や、僅に言こふものにては、峰に木傳ふ猿の聲、賤が妻木の斧の音、是等が音づれならては、正木の葛、青蘿、來る人稀なる所なり。……………

これは一小部分であるが、大概の筆致は窺ひ得られる事と思ふ。後の謠曲「大原御幸」などゝ比べて讀めば、一層興趣の深い事であらう。

平家物語と何れが先か後かといはるゝものに、

(三)源平盛衰記 がある。その前後はわからないという方が穩當であるが、内容は平家が簡明で、盛衰記が詳細である。けれども、その行文の流麗、所謂文學的價值にいたつては、盛衰記は到底平家のそれに及ぶ所でない。勿論盛衰記といつても立派な作で、價値の無いものではないが、こゝには、たゞ平家の悽惋を推して終る事とする。

(四)太平記 は作者また不明。花園天皇の御世から後村上天皇の御時に及んで南北朝の分裂、各所の戦況、忠烈の士の物語などを記載して、その體は平家や盛衰記に倣うて居る。文體は一層雄大で、絢爛の風があるが、餘りに華麗に過ぐるといふ誹もある。平家に比して、世の中の急轉直下といふ程の事がなく、一旦戦亂を味うた民心が更に再び異體の戦亂、而も甚だ長期のにえきらない戦争が續いた爲に、源平のそれほど人心を刺戟しなかつた事が、恰も平家と太平記との行文の上にもあらはれて居るのである。

以上の諸書の参考書としては、
保元物語には

中根 淑

頭書保元物語

三木 五百枝

保元物語講義

鳥野 幸次

保元物語評釋

平治物語には

第五章 鎌倉室町時代

中根 淑

頭書平治物語

今泉 定介

平治物語講義

平家物語には

著者 不詳

平家物語抄

野宮 定基

平家物語考證

内海 弘藏

平家物語評釋

山田 孝雄

校定平家物語

高木 孝武

平家物語考

山田 孝雄

平家物語の新研究

五十嵐 力

平家物語全釋

石川 佐久太郎

太平記には

釋 日性

太平記鈔

釋 乾三

太平記賢愚抄

西 道智

太平記大全

三本五百枝

太平記詳解

十三、謡曲 狂言

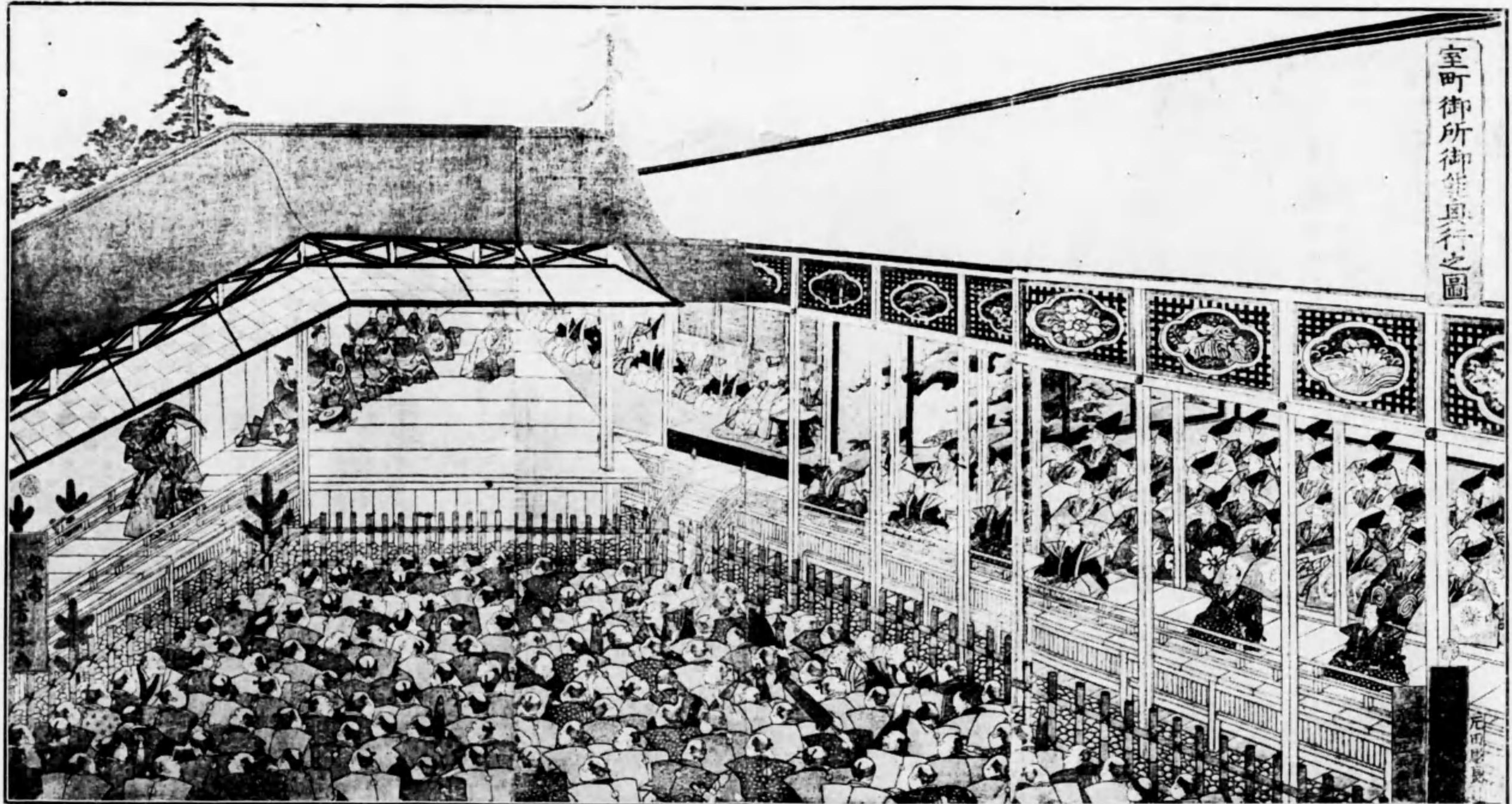
(一) 謡曲 は全く室町時代に發達したもので、委しくは「猿樂の能」といふ所謂「能樂」に用ゐられた歌曲である。元來この能樂は古くから神事に用ゐられて來たのであるが、足利將軍義滿が殊にこれを好んで、他の舞樂と調和せしめ、樂師をして新しい曲をも作らせたもので、舞と共に文學としてもその價值が認められる。その結構の大様は、先づ幽靈があらはれて、往事を語り、高僧の回向によつて、成佛するといふ形式をとつてゐるのが多く、佛教の影響はもとより、詞句には古文辭をも多く補綴してあるが、それがいかにもよく調和して居る。恐らく足利時代は、支那——明代——との交通再び頻繁となつて、僧侶も多く支那に渡航し、宋・元の文化を傳へた所から、かくの如き舞樂といふものも、自然と勃興して、元の戯曲に學んでこの謡曲が新作せられたのであらう。謡曲の材料は平安朝の戀物語と鎌倉時代の武勇物語とが最も多く、これを後の淨

瑠璃の世話物・時代物と區別するのに比べる事が出来る。

現在普通に行はれるものは二百番であるが、すべてを合せると約五百番になる。作者は明らかにはわからぬが、世阿彌元清の創作の多いことは認められる。觀世、寶生、今春、喜多、金剛の五流派によつて題名、詞句等に多少の相違がある。

松風（一節）

シテ、ツレ一聲謡 汐汲車わづかなる、うき世に廻るはかなさよ。ツレ謡 波こゝもこや須磨の浦。月さへぬらす袂かな。シテ、サシ謡 心づくしの秋風に、海はすこし遠けれども、彼の行平の中納言、關吹き越ゆるこながめ給ふ、浦わの波の夜々は、實に音近き海士の家、里離れる通路の、月より外は友もなし。シテ謡 實にや浮世の業ながら、殊につたなき海士小舟の、シテ、ツレ謡 渡りかねたる夢の世に、住むこや云はんうたかたの、汐汲車よるべなき、身は海士人の袖こもに、思を乾さぬ心かな。地謡 かくばかり經がたく見ゆる世の中に、うらやましくも澄む月の、出汐をいざや汲まうよ。出汐をいざや汲まうよ。上歌 影はづかしき我姿、



室町御所御筆具行之圖

(江戸物語に據る)

影はづかしき我姿、忍び車を引く汐の、跡に残れる溜水、いつまですみは果つべき。野中の草の露ならば、日影に消えも失すべきに、是は磯邊に寄藻かく、海士の捨草いたづらに、朽ち増り行く袂かな。朽ち増り行く袂かな。

(二)狂言 は能樂の間に演せられた一種の滑稽劇で、古の散樂の系統をひいたもの、謹嚴な能樂と、洒脫な狂言とは、武家一日の清き消閑となつたのである。その構想は、多く、罪もない失敗談で、その中に滑稽、諷刺、諧謔の意を寓してゐる。文詞も取材も、謠曲に比べてはずつとくだけで、どこまでも當時の社會の人物事件を、當時の口語で綴つてあるが、ただその脚色の千篇一律であるといふ點が、文學的に最も惜しい所である。

現存のもの凡そ二百番、しかし何人の手に成つたかは全くわからない。

櫻 諍

アド主これはこの邊の者でござる。この頃は、何方も花の盛ぢやミ申す程に、花見に参りたう

存ずれども、暇がなさに、参ることも、免致さぬ。最早、暇になつてござる程に、今日は花見に参らうと存ずる。まづ太郎冠者を喚び出し、申し付けう。やい／＼太郎冠者あるか。シテ太郎冠者はあ。アド居たか。シテお前に居ります。アド汝を喚び出す事、別の事ではない。頃日は方々の花盛ぢやと云へども、暇がなさに、花見に行事もならなんだ。最早、暇になつた程に、花見に出てうと思ふが、何とあらうぞ。シテこれは、珍しい事を仰せられます。頃日は、櫻の花が盛ぢやと申す程に、櫻を御覽ぜられうとあらば、尤てござるが、珍しからぬ花を、御覽ぜられて、何にさせらるゝ、アドいや、おのれは何事を云ふ。櫻も花も同じことぢや。シテこれは、頼うだ人も覺えぬ事を仰せらるゝ。さやうに仰せられたならば、人中で恥をかゝせられう、身共は苦しうござらぬが。アドして、汝がその様に云ふは、仔細があるか。シテなか／＼仔細こそござれ。花が見させられたくは、私が鼻を見させられ。他所へござるまでもござらぬ。アドいや、おのれは言語道断の事を云ひ居る。汝が面なは、鼻こいふ。花こいふは別ぢや。シテ左様ではござらぬ。歌なきにも、櫻こは詠まれたれど、花こは詠まれませぬ。アドなかなかでもないことを云ひ居る。その歌を詠うて聞かせい。シテ詠うて聞かせたらば、肝を潰させられう。

(下略)

謡曲の参考書には

- 大井貞恕 謡曲拾葉抄
- 釋 惠南
- 大和田建樹 謡曲通解
- 同人 謡曲評釋
- 長 連恒 謡曲選釋
- 鈴木暢幸 謡曲講義
- 和田萬吉 謡曲物語

狂言には

- 大和田建樹 狂言評註
 - 佐久間春山 新譯狂言記
 - 野村八良 能狂言の研究
- などがある。

十四、雜史

國文で書いた雜史類には、

十訓抄 三卷

古今著聞集 二十卷 橘成季

などがあり、首尾一貫した歴史ものには、

神皇正統記 六卷 北畠親房

増鏡 十卷

がある。十訓抄と古今著聞集とは、断片的の事實を集めて教訓の材としたものもあるが、著聞集は、また當時の世相を知るに、有益な文字に富んで居る。

(一)神皇正統記 は北畠親房の著。親房は村上源氏の出で、伏見天皇以後六朝に歴仕して、後村上天皇の正平六年、三宮に准せられた南朝の忠臣である。常に南朝の恢復に力を盡して、報國の志厚く、遂に戰陣の間にあつて此の書を著はすに至つたので、その主

旨とする所は、素より國體を説いて大義名分を明らかにし、神器の相承から南朝の正統であることを論じた所にあることは、既にこの書名にもあらはれて居る。その文章は和漢混淆體で、字句皆熱血のしたゝりである。行筆また極めて簡潔。

(二)増鏡 は一條冬良の著とせられて居るが、確かな事はわからぬ。しかし後鳥羽天皇の朝から後醍醐天皇の隱岐還幸頃までの事を述べてある所から見れば、建武中興後あまり間のない頃に書かれたものであらうか。これも正統記と同じやうな主義によつて編述されたものであるが、その結構は大體前時代の増鏡や今鏡に倣うたもので、文章も優美莊麗、この種のものとしては大鏡に次ぐべき文學的價値の多い作品である。後世、水鏡・大鏡にこの増鏡をあはせて三鏡と稱する。

以上述べて來た諸書の文體は、特にこゝに掲げる程の事はないと思ふから、すべて省いて、次に参考書を挙げよう。

石橋 尙賢	十訓抄詳解
飯田武郷	校訂神皇正統記
久米 幹文	標註神皇正統記
川喜多真彦	神皇正統記講義
今泉定介	増鏡詳解
和田英球	増鏡新釋
佐藤 孝次	増鏡全釋
竹野一孝	
永井 常曆	

これを以て、鎌倉室町時代の文學を通覽したのであるが、要するに、平安朝とは民心一轉、平安京の狭い範圍を脱して、文化が關東といふ方面に發達した爲に、文學の世界もやゝ廣くなつて、堂上の文學は全滅といふ程でもないが、一方武士の文學が比較的庶民にも及んで、この期の末には徳川時代、文華の荅をふくんで、まさに南風の來るを待つといふ風情があつたのである。

第六章 徳川時代

一、時代の概観

慶長・元和から明治維新まで、凡そ二百六十年の間、政治の實權は武門に存し、文化の指導者としてもまた武人が其の任にあつたのであるが、その武人は鎌倉武士の武骨一片であつたのとは、全く異つて居たのである。徳川家康が、此の期の始に當つて文教の興隆に意を注いだのも、勿論その因となつたのであらうが、此の期を通じて文運は益隆昌に趣いた。

徳川幕府施政の大方針は、道德主義——儒教から出た——であつたから、當然の結果として漢文の興隆は、鎌倉・室町を経て復び平安朝も及ばない程の盛況を呈したのである。即ち儒學攻究の學者間には治國の要を説くもの、修徳の道を講ずるもの、訓詁を専らにするもの、詩文を究むるものなど、各方面の大家が輩出した。要するに、此の

期を通ずる一般の傾向は道德主義であつたから、その文藝も多く勸善懲惡を旨とした趣は、前期に於ける厭世主義中心と對するものである。

儒學の興隆と共に、眼ざめたのは國學である。これは國體の尊嚴と斯學の主張のもとに、純日本の叫をあげたのである。一體これ迄に觀て來た國文學の各種には、哲學的分子を含んだものが、殆ど稀で、佛教の因果觀、儒教の宗教的乃至哲學的思索、これらが相當に國民間に流布して居たといふものゝ、この二を除いた純日本の哲學的思索のあらはれといふものは、見る事が出来なかつたのである。勿論それに類した或ものはあつたであらうが、佛儒二教に刺戟されて段々複雑になつた生活は、こゝにはじめて日本人の内的思索に及ぼうとしたのである。これが國學勃興の中心であつて、これには古典の研究が必要であるから、自然前時代の文學が、此の期に至つて、大いに愛せられかつ闡明せられたのである。國學者のなかには古歌古文の研究に従ふもの、神道、國史の研究に従ふもの、制度、考證、語學の研究に従ふもの、いろいろあつた

が、所詮その基とする所はいづれも國體の發揚に外ならなかつたのである。

徳川時代は殊に階級制度のやかましい世の中であつた。武士の家に生れれば、生涯二本差と株がきまり、町人の家に生れれば、終世算盤をはじく運命であつたのである。上流——武士——の間に行はるゝ文學は、町人輩の近づくべからざるもの、下流——町人——の遊戯文學は、武士の顧みもせぬものとなつて居たのであるが、この階級といふものも、末期に及んでは段々繩がゆるんで來て、これを打破つたのが、即ち明治維新である。この氣運は、幕府の末期に至つて町人の意氣よく腰拔武士を翻弄した所にあらはれて居るので、情事に事よせて助六が、鳥居新左衛門をやつつける芝居は、今日までもなほ人々の喝采を受ける所である。武士の政府が武士の辱しめられる芝居を禁止する勢力さへ無くなつてしまつて居たのである。

印刷の術が文化の進運に、非常な助をなすものである事は、各國の歴史が物語つて居る。奈良朝時代既にこの術が傳つてゐた事は、前に述べたが、其の後この事は殘念

ながら他の物質文明と並行して進歩するに至らず、纔かに經文の印刷に應用せられて居た位のものであつた。所が家康が文教を重んじた心から、朝鮮の活字に學んで、活版の術を興さしめた。けれどもこれが西洋活版術のやうに、便利に行かなかつた爲、進歩は一旦止んだが、他に木版——整版——の術が、中期以來盛になるに至り、かくて文運の進歩には非常な貢獻をなしたものである。そして單に文字を印刷するばかりではなく、その影響は美術方面にも及んで、艶麗な繪畫——浮世繪——を生ずるに至つた事は、我が邦の文藝史——文明史——を通じて、殊に此の時代に注意せねばならない一事であらうと思ふ。

徳川時代のうち、文藝上の區分をすると、前期、即ち元祿享保の頃を中心にしては京阪の地が榮えた。所謂上方文學である。それに次いで、後期、即ち文化文政を中心にしては、江戸に文學の花が咲いたのである。これを江戸文學といふ。この二つは自ら性質の異ふ點もあるが、こゝにこれをいふのは、殊に此の期に起つた新興の文學に就い

ていふのである。

二、漢學

曩にも平安朝とこの期とは、日本文學史中最も文學の榮えた時であると述べたが、この期の文藝復興の魁をなしたものは、先づ漢學である。藤原惺窩と林羅山とは斯界の先驅者である。惺窩は冷泉家の出で、はじめは、佛門に入り五山の間はその名が高かつたが、後儒教に志して遂に僧門を脱した。家康に伏見城に聘せられて經史を講じた事がある。惺窩の廣大な着眼は、政治家家康の心を養うたものが、多かつたに相違ない。然し、惺窩は後、門下の羅山を推舉して、幕府の帷幄に參せしめ、羅山は江戸に下つて、その律令制度の制定に參與した。それから後は、林家は代々大學頭といふ事になつて、儒學を以て幕府に仕へるに至つた。この林家の學といふのは、朱子學であつて、朱子學は既に南北朝の頃から我が邦に入つて居たのではあるが、徳川時代に及んで、はじめて大いに興隆の氣運に向つたのである。この朱子學のほかは陽明學もま

た盛であつた。有名な中江藤樹は近江聖人と稱せられるほどで、實踐躬行を勵み、主として孝經を講じ、近隣皆その徳に服したといふ事である。また、熊澤蕃山はこの門から出て備前侯に仕へ、大いに治績を擧げた。かくの如く、朱子學、陽明學は、此の期を通じて、上下に行はれたのであつて、これが即ち前に云つた、道德主義の世の中を形成したのであらう。漢文そのものとしては、復興の氣運と共に立派な文章が書かれ詩が賦せられるに至り、かくて鎌倉時代の變體的漢文は衰へはて、其の殘影をこゝめたに過ぎない。

なほ元祿の世に至つては、將軍綱吉が漢學を好んで、しばしば儒者をひいて經書を講せしめた事がある爲に、各諸侯も争うて儒者を聘するといふ風になり、その結果として漢學はいよいよ隆盛に向つた。當時幕府には羅山の孫鳳岡が居た。また京都の人木下順菴は江戸に出て一家をなし、その門下には雨森芳洲、新井白石、室鳩巢、祇園南海など著名の士が多く出た。更に、京都には伊藤仁齋が起つて、朱子學は孔孟の眞意

にあらず、宜しく古にかへるべしというて、別に古學を稱へた。これを復古學派といふ。その子の伊藤東涯もまた博覽の學者で、よく父の道を祖述した。

この時、江戸には、荻生徂徠が出て、等しく朱子學を駁したが、これは、古文辭學を立て、復古學派に對して、東西相對峙の姿をなした。徂徠の門人、太宰春臺は經義に精しく、服部南郭は詩文に長じて居る。

元祿の世は、漢文に國文に、研究に創作に、何れの道にもみな、大きな發展をしたのである。漢文界の興隆は大體、以上のやうな有様である。

三、歌 謡

此の期の和歌は、平安朝の系統を帯びたもの——即ち前代から引續いての一派があつて、細川幽齋、木下長嘯子はその代表的作家である。幽齋は古今傳授の繼承者として有名になつて居るが、戰亂の間にあつて、よく前時代の歌道歌學を傳承した功は、傳統的精神の強かつた當時としては、大事件であつたに相違ない。しかしながら幽齋

の出現はまさに枯れようとする前代歌壇——二條家——の最後の花を咲かせたに過ぎないのである。木下長嘯子は豊臣勝俊といひ、秀吉とは姻戚関係のあつた人、武人で且つ歌人である點が幽齋と似てゐる。その歌は幽齋に比して寧ろ新味を帯びてゐるといふことが出来る。

この舊派に對して、潑刺たる時代精神のあらはれは元祿期に及んで、和歌從來の傳統と形式とを打破して、古學の真相と古典の源流とを汲まうとする傾向が現れるに至つた。その革新の第一聲を揚げたのは下河邊長流、戸田茂睡、釋契沖、つゞいて荷田春滿がある。けれども此の期は革新の烽火を擧げたに過ぎない、いはば黎明期で、實行期ではなかつたのである。

この舊套打破の精神を承けて、よくこれを作歌の上にはしたしたのは、春滿の門から出た賀茂真淵である。真淵は國學者として偉大なる功績を残した人、しかもその本質は文人たり詩人たるにあつたやうである。門下の田安宗武、楫取魚彦、橘千

蔭、村田春海、本居宣長、いづれも當代の名家であつた。

下河邊長流

夏の夜の 深草山の 郭公 伏見のゆめの おこになくなり

戸田茂睡

秋の色の ながめにかへて このころは 高根のあらし 麓のしぐれ

釋契沖

初瀬のや 里のうなるに 宿さへば 霞める梅の 立枝をぞさす

荷田春滿

ふみわけよ 大和にはあらぬ 唐鳥の あみをみるのみ 人の道かは

賀茂真淵

見渡せば 天の香具山 畝火山 あらそひたてる 春霞かな
信濃なる すがの荒野を 飛ぶ鶯の つばさもたわに 吹く嵐かな

を筑波も 遠つ葦穂も かすむなり 嶺越し山越し 春やきぬらむ

田安宗武

青雲の 白肩の津は 見ざれども こよひの月に おもほゆるかも

楯取魚彦

天の原 吹きすさみたる 秋風に はしる雲あれば たゆたふ雲あり

橘 千蔭

おほ空を 霞も霧も へだてねば 夏こそ月は 見るべかりけれ

村田春海

面影も 見し世に似たる 秋なれば 月の鏡も むつまじきかな

本居宣長

里遠み たざる末野の 夕ぐれに しるべうれしく 立つ煙かな

真淵門によつて古調が唱へられてゐた時、舊派から出て、しかも新味ある歌を詠んだものに小澤蘆庵がある。蘆庵の主張も所詮は真淵等の主義と根本は同じものである

が、その形式的方面では蘆庵は「ただことうた」を唱へて平易な詞を用ゐるべきことを説き、真淵門に對したのである。

蘆庵に次いで新調を以て一世を風靡したものに香川景樹がある。その説くところ、ほど蘆庵に似てゐるが「歌はことわるものにあらず、調しらべぶるものなり」と云うて「調しらべべ」をすべての標準に立てたところ、更に一步を進めた観がある。門下に木下幸文、熊谷直好、八田知紀があるが、幸文の詠は真情流露して景樹門第一の歌才といふべきである。

この頃、また別に萬葉ぶりの歌を詠んだものに、越後の僧良寛、備前の平賀元義、福井の井手曙覽、福岡の大隈言道がある。要するに近世の歌人は、各自の個性を明らかに詠み出して居る點に於て従來の歌人と異なつて居る。これは特に注意すべき所である。

小澤蘆庵

第六章 徳川時代

山かげに 一木のこりて 古松の 吹雪にむせぶ 聲ぞかなしき
香川景樹

残りなく 松の姿は あらはれて いまだはなれぬ 山の端の月

木下幸文

鳴きつゞく 道の長ての 虫の音に 折々まじる 水の音かな

熊谷直好

うちしきる 籠の里の 鳥が音に 明けこそわたれ 三保の松原

僧良寛

霞立つ ながき春日を 子供らに 手まりつきつゝ けふもくらしつ

平賀元義

妹が家の 向ひの山は 真木の葉の 若葉涼しく 生ひ出でにけり

井手曙寛

荒駒の 草かむ音に 何がしの 宿直する夜に 人もしりけん

大隈言道

親泣けば 子さへ泣くなり 世の中の せんすべなさも 何もしらずして

四、俳諧 發句

室町時代に和歌から生れた連歌は、一轉して俳諧を生み、再轉して此の期には發句
俳句——を生み、非常な流行を見るに至つた。發句といふ詞は、俳諧のはじめの
句といふほどの意味で、これに對して最後の句を揚句と云つた。

元來連歌は餘りに規則づくめで、自然、清新の氣風に乏しいといふ恨があつた。こ
れを慨して起つたのが荒木田守武、山崎宗鑑で、幾分の滑稽味も交へ、洒脱な趣をも
加へて、俗世間的な調を唱へたのである。形は連歌と同様であるが、これを特に俳諧
と稱した。然るにその後に出た松永貞徳は、更にこれを古にかへして古風を稱へ、卑
俗にのみ流れる傾向をひきしめようとした。即ち一旦法式から解放されてゐた俳諧は、
こゝに至つてまた規則に縛られる事となつたのである。

貞徳は幽齋に和歌を學んだ人であるが、和歌は到底その技ではなかつた。著書に「御傘」「淀川」「油糟」などがある。今「油糟」の中から一部を抄録して見よう。

秘藏の花の枝をこそ折れ

正月の餅で泣く子をすかしかね

十王堂に秋かぜぞふく

六波羅の月やむかしを思ふらん

人間萬事いつはれる中

わが君の正直さにもうちこみて

變らじこさらば誓紙を下されよ

内證て年はいくつこ聞かまほし

栗津の原の茶こそ苦けれ

桃食ひし口は後まであまくして

あまり煙の立つぞ悲しき

玉鹽釜の景よきうらに月出で、

淋しくもあり淋しくもなし

そろそろ隣のてきる草の庵

人丸の歌の味のうまさよ

ほのぼのこ赤くなりたる柿むきて

次に出たのが西山宗因である。宗因の主張は貞徳の古風を排して、清新自由な内容のある一風を創めるにあつた。即ち舊格を墨守する事なく、好んで世の諺、漢字、字あまり、などを用ひて、寧ろ放縦に近い一體を興したのであるが、これが時流に投じて、大阪を中心に、一時非常な勢力を得たのである。この一派を檀林派——また談林——といふ。

この頃、貞徳の門には野々口立圃、安原貞室、北村季吟などがあり、各主張のもとに立つたが、宗因門下にも井原西鶴、田代松意が出て、檀林のために勢を張り、かく

て俳壇は檀林風に靡いてしまふ有様であつた。しかしながら、此の派は元來貞徳の古風に反抗し、これを破るために起つたものであるから、宗因その人の作品には一家の見があつたが、所謂末流のものに到つてはその精神を誤り解して、いたづらに形式句法の末技に拘泥し、奇怪な語句を列ねるのを以て檀林の新奇と考へるやうになり、その結果は漸く此の派の影の薄らぐを見るに至つたのである。

檀林棹尾の作家に小西來山、上島鬼貫がある。特に鬼貫は檀林の糟粕をなめるを事とせずして、一方には蕉門の人々とも交り、その作風また芭蕉と自ら通するところがあつた。

西山宗因

古歌に曰く 千歳ぞ見ゆる 鏡餅

初花や いそぎ候ふほごに これははや

さればこゝに 談林の木あり 梅の花

やがて見よ 棒くらはせむ 蕎麥の花
いごま申し かへる山々 しぐれかな

五、芭蕉

檀林風の流行は一時非常な勢であつたが、その中に漸く弊風も認められるやうになり、その結果として俳壇は何か他に新しいもの、出現を望むの風があつた時、卓絶の才を以て、天下の俳風を一變したものは、實

松尾芭蕉



(博文館、俳諧文庫芭蕉全集に據る)

に松尾芭蕉その人であつた。芭蕉は、一に桃青と號した。この號のよつて來る所は、彼

の崇拜措かなかつた支那一世の大詩人李白に對したものと、傳へられて居る。であるからその人となりも、また相似たものがあるので、歌人西行を心の友として、芭蕉の足蹟は全國に至らざるなしと云はれるほどである。今日到る所に芭蕉塚のあるのは、誰も知る所であらう。

古池や 蛙飛こむ 水の音

に至つて、芭蕉は果然解悟の境に入り、人生の奥祕を得たといはれて居るが、文學の極致が、かういふ風に見られて來た事は、確かにこの時代でなければ見られない現象で、人生の複雑になりゆくと共に、其所に哲學的思索の觀念が啓けて來たのであらう。芭蕉が、技巧はそもそも末、中心の感情が基であると稱へ來つた平素の主張は、この一句に自信を得たと傳へられる。抑、芭蕉の俳句は、そのはじめ多く漢語を用ゐて絢爛の調を主としたものから、中頃花も實も並せ得んとして苦吟した時代、終には切磋琢磨の功を得て、不易の中に反つていふべからざる情趣を探知し得たといふ、この

三轉を経たものである。玉石混淆は天才詩人の常であつて、西行に見たと同様、芭蕉もまた興に乘じ機に應じて、大小併せなし、清濁併せ吞むといふ氣風があつて、其所に芭蕉の大を認むる所以もある。

夏草や つはものごもの 夢のあこ

荒海や 佐渡に横たふ 天の川

塚も動け 我泣く聲は 秋の風

かけ橋や 命をからむ 葛紅葉

猪も ごとに吹かるゝ 野分かな

おころへや 齒にくひあてし 海苔の砂

ほろほろこ 山吹散るか 瀧の音

白露を こぼさぬ萩の うねりかな

飲みあげて 花いけにせん 二升樽

麥飯に やつるゝ戀か 猫の妻

三井寺の 門たゝかばや 今日月

奈良七重 七堂伽藍 八重櫻

花の雲 鐘は上野か 淺草か

古郷や 臍の緒に泣く 年の暮

これらは、その一部であるが、餘韻嫋々、十七文字の小に、よく大景を含ませ、人生の祕奥に觸れざれば止まぬといふ態度が窺ひ得られるではないか。

六、その他の諸家

芭蕉の門下に

榎本其角 服部嵐雪 森川許六 各務支考 越智越人 向井去來 内藤丈草

河合曾良 志田野坡 立花北枝

の十哲があり、その他なほ

岩田涼菴 山口素堂 天野桃隣 大淀三千風

のやうな名匠が出たので、俳壇は遂にこの一派によつて風靡せられてしまふに至つ

た。これを正風といふ。しかしながら、一面に於ては、芭蕉の歿後、その多くの門下は互に異なつた主張を以て門戸を立てるやうになり、ひいては芭蕉の精神は失はれるやうになり、かくして俳壇は生氣のないものとなるに至つた。

此の間に在つて、幾分の異彩を放つたものに横井也有と炭太祇とがあり、この過渡期を経て俳風改新を成した人に谷口（與謝）蕪村がある。蕪村の句は、詩的空想から出て繪畫趣味を帯び、色調頗る華麗、巧緻である點にその特色がある。芭蕉の句に比して、幽玄閑寂の趣は甚だしく失はれて居るが、藝術味の豊富に盛られて居る事は認められる。こゝにまた彼が畫家たりし一面も想見し得られるのである。

蕪村と並んで天明の六俳家といはれたものに

三浦栲良 大島蓼太 加舎白雄 加藤曉臺 高桑園更

があり、女流には加賀の千代がある。かくて一時は中興を見た俳壇は、これらの名家の物故と共に、また混沌たる状態に入り、いたづらに俗調、模倣のみが行はれる事と

なつたが、此の時に當つて一道の光明を投じたものに俳諧寺一茶がある。

一茶の生涯は實に悲惨なものであつた。貧苦に苦しみ繼母の笞に虐げられ、逆境から逆境へと轉々したその一生は、作句の上に眞剣な、沈痛な涙に満ちたものとしてあらはれ、一方にまた人間味に富んだ温い同情の聲として響いてゐる。一茶と同時に安井大江丸があり、夏目成美があり、更に下つては天保の頃成田蒼虬、櫻井梅室、田川朗風があつたが、その作風には既に元祿天明の俤を偲ぶに足るものもなく、かくして幕末に及んだのである。

次に以上の諸家の句を擧げて見よう。

榎本其角

鶯の 身をさかさまに 初音かな

夕納涼 よくぞ男に 生れたる

夕立や 田をみめぐりの 神ならば

明月や 疊の上に 松の影

鐘一つ 賣れぬ日はなし 江戸の春

服部嵐雪

梅一りん 一りんづつの あたゝかさ

文もなし 口上もなし 粽五把

黄菊白菊 そのほかの名は なくもがな

向井去來

應々こ いへぎたゝくや 雪の門

元日や 家に讓の 太刀はかん

湖の 水まさりけり 五月雨

内藤丈草

取りつかぬ 力で浮む 蛙かな

春雨や ぬけ出たまゝの 夜著の穴

各務支考

牛叱る 聲に鳴立つ 夕かな

そこもこは 涼しさうなり 峯の松

谷口蕪村

鶯の なくや小さき 口あけて

春水や 四條五條の 橋の下

時鳥の平安城をすじかひに
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな
不二ひみつ うづみ残して 若葉かな
俳諧寺一茶

蕪村の筆蹟 (青木存義氏所藏)

春の海 ひねもすのたり のたりかな
御手討の 夫婦なりしを 更衣

時鳥 平安城を すじかひに

鳥羽殿へ 五六騎いそぐ 野分かな

不二ひみつ うづみ残して 若葉かな

俳諧寺一茶

われこ来て 遊べや親の ない雀

早乙女や 子のなく方へ 植ゑてゆく

もたいなや 晝寝してきく 田植唄

やれうつな 蠅が手をする 足をする

是がまあ 終の栖か 雪五尺

七、俳文 狂歌 狂句

(一)俳文 俳諧の流行と共に、俳人の間には、俳味を帯びた小品文を綴ることがはじまつた。これを俳文といふ。芭蕉の「奥の細道」は實にこれの魁をなすもので、このほか「野ざらし紀行」「鹿島紀行」はいづれもすぐれたところがある。芭蕉門下の俳文

は、「風俗文選」(森川許六撰)「本朝文鑑」(和漢文操)「各務支考撰」によつて見る事が出来る。しかしその大成は安永天明の頃横井也右の出現によつて、はじめて輕妙洒脫の趣を完備するに至つた。也右の著「鶉衣」は實にその上乘なるものである。

奈良團贊 (鶉衣の一節)

青によし奈良の帝の御時、いかなる叡慮にあづかりてか、此の地の名産はなれりけむ。世はたゞ其の道の藝くはしからば、多能はなくてもあまし。かれよ、かしこも風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたゞまれて、公界にへつらふねぢけ心もなし。たゞ木の端ご思ひすてたる雲水の生涯ならむ。さるは、桐の箱の家をも求めず、ひさごがもこの夕すゞみ、晝寢の枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また來る夏をたのみこも見えず、物置の片隅に紙屑籠に相住して、鼠の足にけがさるれども、地紙をまくられて野ざらしなる扇にはまさりならむ。我汝に心をゆるす。汝我に馴れて、はだか身の寢姿を、あなかしこ、人にかたる事なかれ。

(二)狂歌 は形式の上からは和歌と全く同じものである。多くは古歌をもじり、俗語

を用ゐて、滑稽味を漂はしたもので、前時代には決して見なかつた文學の一つである。これは當時他の滑稽ものと同じく、こんな氣風が町人の間に起つたものであらう。武士に對しては頭の上らなかつた町人、和歌は上流の専有とあつた時代、かういふ時であるから町人の心中には、せめてかうした駄洒落や滑稽に世の中を茶にして見たい氣分があつたものであらう。作者には石田未得、半井卜養があり、次いで元祿の頃鯛屋貞柳が出て、更に文運東遷後、天明の頃に、江戸に唐衣橋洲、四方赤良、朱樂菅江、大屋裏住、手柄岡持等が出て全盛を極め、就中四方赤良——蜀山人——は狂歌の代表者を以て稱せられる。

この頃からは狂歌の點者を職とするものが現はれるやうになり、鹿都部眞顔、宿屋飯盛を最後として此の道もやがて衰微墮落の行程をとるに至つた。

唐衣橋洲

菜もなき 膳にあはれば 知られけり しぎやき茄子の 秋の夕ぐれ

鯛屋貞柳

散ればこそ いこゝ櫻は めてたけれ けれごもけれごも さうぢやけれごも

四方赤良

ほこぎす 啼きつるあこに あきれたる 後徳大寺の ありあけのかほ

生酔の 禮者を見れば 大道を 横すじかひに 春は來にけり

駒こめて 袖うちはらふ 世話もなし 坊主合羽の 雪の夕暮

朱樂菅江

やれやれこ 潮のひるめし いそぐなり 青海原の へるにまかせて

鹿都部眞顔

あらそはぬ 風の柳の 絲にこそ 堪忍袋 縫ふべかりけれ

宿屋飯盛

歌よみは 下手こそよけれ 天地の 動き出して たまるものかは

世わたりの 道にふたつの 追分や たからの山に 借金の上

(三) 狂句——川柳——は俳句から出たもので、恰も狂歌が和歌から出たと同様である。亦狂歌と同じやうに俗語を用ゐてゐるが、人情の弱點をさらへ、世態の缺陷を穿つて、諷刺、皮肉、滑稽をその中に含ましめて居るところは所謂寸鐵人を刺すの慨があつて、此の點では狂歌に見る事の出來ぬ鋭さを持つてゐる。川柳といふ名は、江戸淺草の柄井川柳が點者をしてゐた事から起つたもので、川柳の集に「やなぎだる」といふがあり、今百數十篇を存してゐる。

大屋から 勅使をうける 月見をし

人の尾を 大みそかには 狐が見

去つた翌日 ものを探すに かゝつて居

唐人も 二十四いろに 子をいぢめ

末長く いびるさかづき 姑さし

わらぢくひ までは能因 氣がつかず

かみなりを まねて腹掛 やつこさせ

清盛の 醫者ははだかて 脈をこり

風吹けば さころか女房 あらしなり

何こも 申しかねぬから かりに来る

居候 三杯目には そつこ出し

ねがはくば 妻の死水 みる氣なり

よつ引いて ひようこ放さぬ 案山子かな

八、淨瑠璃 脚本

(一)淨瑠璃 元祿の世は、束縛と傳統とを脱して、自由に活きんとした自覺が世の中の一部に起つた時である。即ち個性發揮の時代で、従つていたづらに古人の糟粕を嘗めないといふ氣風のあつたのは、俳句に芭蕉を見出したと同じく、戯曲に於ては實に近松門左を得たのである。

淨瑠璃は平家琵琶を基礎として、これに能樂、幸若舞曲、説教節、祭文等の節を巧みに取り合せて作つた語り物で、三絃樂の發達と共に、操り人形を踊らせ當時の嗜好に投じたのである。

淨瑠璃の名手としては、堺の人、薩摩太夫淨雲がある。寛永の頃江戸に出で、快活豪壯な趣味を有する殺伐な武勇傳説を語り、盛名を博した。金平本もこの頃に出たもので、江戸人の人氣に投じたが、内容は幼稚な英雄談に過ぎず、藝術品としての價値は乏しい。淨雲の門下では杉山丹後掾、虎屋源太夫、虎屋長門掾、櫻井丹波少掾が名高く、源太夫の門に伊勢島宮内、井上播磨掾が出て、宮内の門に宇治加賀掾を出し、播磨の孫弟子に竹本義太夫を出した。この竹本義太夫は諸家の長所を採つて一家を創め、大阪に竹本座を建て、こゝに一代の靈筆近松門左と提携して義太夫節を完成した。かくて遂には淨瑠璃を義太夫と稱せられるに至らしめたのである。この二人の出現以前、即ち貞享二年以前のものを稱して普通に古淨瑠璃といふ。

淨瑠璃の作者としては門左がその第一人者であるのはいふまでもない事であるが、その後にも數多くの作家が輩出して居る。しかしいづれも門左に比すべき程のものでもないから、こゝには参考のために元文・寛保から寶曆・明和にかけての作者と著作を掲げるに止めて置く。

紀海 音 八百屋お七歌祭文 油屋お染袂の白絞 傾城國姓爺 鎌倉三代

記 心中二腹帯

竹田 出雲 假名手本忠臣藏 菅原傳授手習鑑 義經千本櫻

並木 千柳 一谷嫩軍記 忠臣金短冊 刈萱桑門筑紫轢

西澤 一風 北條時頼記

松田文耕堂 大塔宮曠鎧

近松 半二 本朝二十四孝 關取千兩幟 伊賀越道中雙六 妹背山婦女庭訓

平賀 鳩溪 神靈矢口渡

以上は今日の淨瑠璃語りにも、演劇にも屢々我々の耳に眼に觸れる所である。淨瑠璃は操人形の衰へると共に、作者にもまた其の人なく、漸く衰微するに至り、これに代つて同系統のものがあらはれたのは脚本である。

(一)脚本 は、演劇——歌舞伎——芝居——のせりふをはじめ、舞臺の模様、俳優の動作、服装などまで記したものである。歌舞伎の起りは、慶長の頃の女歌舞伎にはじまり、次で若衆歌舞伎となり、名優の出現と共に漸く盛になつたもので、また淨瑠璃の發達に負ふところが多い。

これは明和・安永頃から文化・文政頃、所謂歌舞伎芝居の發達と共に、多く作られるに至つた。

並本 正三 契情天羽衣 三十石燈始 日本一和布刈神事

奈河 龜助 競伊勢物語 伊賀越乗掛合羽 加賀見山廓寫本

並木 五瓶 金門五山桐 五大力戀絨 隅田春妓女容性

櫻田 治助 名譽仁政錄 碁盤忠信 契情吾妻鑑

鶴屋 南北 東海道四谷怪談 お染久松色讀販

古河默阿彌 三人吉三廓初買 村井長庵巧破傘

などはこの期に有名なもので、その外河竹新七、瀬川如阜なども脚本に筆を執つて居る。

九、近松門左衛門

近松は巢林子と號し、名聲一時に高く、その作物も、或は英國のシェークスピアに比べられるほどであるが、その傳記は至つて不明。生國もわからず、終焉の地も知るに由ない。そのはじめ井原西鶴に學んだと傳へられるが、近松は西鶴の下流に立ち難く、方面を別にして、遂に淨瑠璃を大成したのである。京都にあつては、縉紳一條家に仕へて位階までも授けられたといはれるが、後、都人士の間に評判の高かつた歌舞伎の脚本を、都萬大夫座の爲に書いた事もあるといふ。しかしこれも餘り面白くなか

つたのであらう、終に大阪に出て、道頓堀に竹本座を持つて居つた、操人形芝居の太夫——竹本義太夫(筑後掾)——と相結んで、その淨瑠璃に筆を執るやうになつた。其の以前宇治加賀掾、井上播磨掾の爲にも書いた事があるのであるが、貞享年間竹本座の座附作者となつて以來が、専ら門左の門左たる才能を發揮した頃である。即ち當時の大阪市民が、新藝術の妙に酔はされて、喝采又喝采の大入を續けたのも無理のない事である。近松の作は全體を通じて、人情の微を穿つて、その文中にあらはれる人物が一々眞に迫る有様が、他に見られない特長である。近松の作を大別すれば時代物と世話物となる。時代物といふのは、世界を史上の事實又は人物にとつたものであるが、元祿の世は現實主義であつたから、作中に出て來る武士、例へば義經にしても辨慶にしても、その當時の人物に等しい口調を以て綴られ、あらはされて居るのは面白い事である。世話物といふのは、眼前の事件を捕へて、早速淨瑠璃に作り上げあやつりにかけて、市民の喝采を博せんとしたものである。この兩種は勿論同時に行はれた

のであるが、當時人形芝居の本體といふものはやはり、時代物にあつたのであつて、世話物は二番目ものとして、餘興の爲にせられた傾向がある。近松自身も、その最も意を注いだ所は、やはり時代物にあるので、當時の人々も、またこれを迎へて、國姓爺合戦、曾我會稽山などには寢食を忘れ、うつゝを抜かしたのであらう。然し曾根崎心中、天の網島のやうな人情ものは、なほ全然舊習の束縛を脱する事の出来なかつた當時の人には、これらが不朽の大作である事は、氣がつかかなかつたので、其の風習人情の間にあつて一步を先んじた所に巢林子の凡庸ならざる點が認められる。

巢林子の文章は、實に自由自在で、その詞藻の豊富な事は、古語、漢語、佛語、或は西洋語に及び、一度筆を執つて紙面に向へば、千言萬語立どころになるといふ有様である。初期の作物は、題材を謡曲にとり、その文辭さへそのまゝを用ゐたものがあるが、彼の天才は、作の進むに従つて圓轉、莊重、また洒脱、實に端睨すべからざるものとなつた。蓋し、我が邦に生じた大文豪を以て許すに、誰人も吝ならざる所であら

(本平公) 本璃瑠淨古

公平
物後

（以下は手書きの古文）



う。随つて彼が用語の今日に解釋し難きものも頗る多い。

國姓爺合戦の一節

かゝる所に勢子のもの、群り來る其中に、大將におほしきもの、大音擧げ

「ヤアヤアうぬはいづくの風來人、我高名をさまたぐる。其虎は恭けなくも主君右將軍李踏天より、韃靼王へ獻上の爲、狩り出したる虎なるぞ。早々渡せ。異議に及ばゞ打ち殺さん、しやぐはんしやぐはん」

と喚きける。李踏天に聞くよりも、願ふ處に笑壺に入り、

「ヤア饑鬼も人数、しほらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來は舌長し、左程欲しがる虎ならば、主君に頼む李踏天にやら、石花菜にやら、こゝへつき出し訛事させい。直に逢うて用もある。左もない内はいかなこも、ならぬならぬ」

と睨め付くる。

「ヤア物ないはせそ。打ち取れ」

と、一度に劍をばらりと抜く。「心得たり」と護符を虎の首にかけ、母の傍に引き据うれば、繋ぎ

し如くに働かず。オ、心易しと、太刀指し鬩し、群る中へ割つて入り、八方無盡に割り立て割り立て、撫で捲る。列卒の大將安大人、官人引き具し立ち歸り、「おのれ老耄餘さじ」と、一文字に切りかゝる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加つて、勃然と起きて身慄し、敵に向ひ齒を鳴し、猛りうなりて飛び蒐る。「這是適はじ」と安大人、列卒のものが指いたる劍、かり鉾、數鎗手にあたるを幸に、投げつけ投げつけ、打ちかくる。虎は神力自在を得、劍を宙に引つ喰へ引つ喰へ、岩に投げ當て微塵になす。及の光玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物盡くれば官人にも、色めき立つて逃げ惑ふ。後より和藤内、きつこい遣らぬ顯はれ出て、安大人が素首を掴んでさし上げ、クルクルと振り廻はし、エイヤツと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。此勢に官人原、後へ戻れば悪虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立につつたちたり。「ア、申し御勸忍、御免御免」と手を合せ、土に喰ひつき泣きあたる。

和藤内虎の背を撫で、

「うぬ等が小國にて侮る日本人、虎さへ怖がる日本の手練を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に生長せし和藤内は我事なり。先帝の妹宮、梅檀皇女に巡り逢

ひ三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立ち歸り、國の亂を治むるなり。サア命惜しくば、味方につけ。否こいへば虎の餌食、否か應か」
こつめかくる。

「喃何の否で御座りましよ。韃靼王に従ふも、李踏天に従ふも、命が惜しさ。向後お前の御家來きも、お情頼み奉る」

こ地に鼻つけて畏る。

「オ、出來した出來した。去りながら我家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん」

こ指添の小刀はづさせ、是も當座の早剃刀。母も手々に受取つて、竝ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやらこぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬く暇に剃りしまひ、二櫛半のはらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合はせて、頭冷つく風引いて、噓々村さめ村さめこ、涙を流すぞ道理なる。

親子ドツト打笑ひ、「揃ひも揃うた供廻り。名も日本に改めて何左衛門、何兵衛、太郎、次郎、十

郎まで、面々が國所、頭字に名乗り、二行に立つてぼつたてろ」承り候ふ」こ、お先手の手振の衆、ちやぐちう左衛門、東蒲塞右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅太郎、白城次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉郎、もうる左衛門、ぢやが太郎兵衛、さんさめ八郎、英吉利兵衛、今參のお伴先、跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取り口取り國を取る、譽は異國本朝に、踏み跨げたる鞍鐙、虎の背中に打ち乗つて威勢を千里に顯はせり。

天の網島の一節

福德に天神の名を直に、天神橋こ行き通ふ、所も神の御前町、營む業も紙店に、紙屋治兵衛こ名をつけて、千早振るほぎ買ひに来る、かみは正直、商買は所がらなり老舗なり。良人が炬燵にうたゝねを、枕屏風で風防ぐ。外は十夜の人通、店こ内こを一締に、女房お三の心配り。日は短し夕飯時、市の側まで使にいて、玉は何してをる事ぞ。此三五郎めが戻らぬここ、風が冷い、二人の子供が寒からう。お末は乳を呑みたい時分も知らぬ。阿呆には何がなる。辛氣な奴ぢやこ獨言、母様こ戻つたこ、走り歸る兄息子。
「オ、勘太郎戻りやつたか。お末や三五郎は何こした」

「宮に遊んで乳呑みたいよ、お末のたんこ泣きやりました」
「左様こそ左様こそ、これや手も足も釘になつた。父様の寢てござる炬燵で、あたつて暖まりや。此阿呆めさうせう」

こ、待ちかね見世に馳けいづれば、三五郎、只一人、のらのらこして立ちかへる。

「こりや愚鈍。お末はここに置いて来た」

「ア、ホンニ何處でやら落してのけた。誰ぞ拾つたか知らんまで、何處ぞ尋ねて來ませうか」

「おのれまああ大事の子を、怪我でもあつたら、擲ち殺す」

こ喚く處へ下女の玉、お末を背中に

「オ、オ、いこしや。辻に泣いてござんした。三五郎守するなら、ろくにしや」

こ喚き歸れば

「オ、可愛や可愛や。乳呑みだからうの」

こ同じく炬燵に添乳して、

「是玉その阿呆め、覺えるほこ擲はしやくらはしや」

こいへば、三五郎かぶりふり

「いやいやたつた今、お宮で密柑を二つづつ食はせ、私も五つ食うた」

こ阿呆の癖に輕口だて、苦笑するばかりなり……………

詞藻の豊富と輕妙の筆致、俗に入つて俗ならざる近松の妙趣は、この一例にも窺ひ知る事が出来る。その傑作と稱せられるものは、時代物には

國姓爺合戦 曾我會稽山

があり、世話物には

會根崎心中 冥途の飛脚 心中天の網島 女殺油地獄

などがある。その他

雪女五枚羽子板 傾城反魂香 碁盤太平記 夕霧阿波鳴渡 鍵の權三重帷子

博多小女郎波枕 心中宵庚申

などいづれもすぐれた作品である。

近松に關する研究には、

饗庭篁村 巢林子選註

第六章 徳川時代

藤井紫影 巢林子評釋
高野辰之 近松世話淨瑠璃詳解
加藤順三 近松戯曲新研究
などがある。

十、散文——和漢混和文

江戸時代の散文を概観すると、漢學者が假名を交へて漢文から出た國文を綴つたもの、國學者が古體の文章を學んで所謂雅文を草したもの、そのほか小説に、俳文に、滑稽文に、その種類の多い事は、實に前代未聞の盛況を呈して居る。また作物の上には歴史、傳記、日記、紀行、隨筆、評論、考證など、多方面にわたつて、非常な發展をした。こゝには先づ、漢學出の學者が、漢文は専門家のもの、文教の弘布には、平易の文を要するとして、こゝに一體の文を綴つたものを一類として、これを和漢混和文とし、その代表作家に就いて、内容を見ることにする。

漢文學の項で、さきに藤原惺窩、林羅山などの事を述べて置いたが、この兩人は、初期漢學復興の先驅で、その綴る所の文章は、純漢文を得意としたのであるが、一方

に二人とも和歌の作が今日に残つて居るし、既に羅山の著述にも和漢混和の文があるのであるから、漢學者といつても、決して國文を排斥し、輕んじ、指だも染めなかつたといふのではない。また元祿以後に起つた國學者の側でも、先づその素養は漢文に出發したのであるから、國學者の漢學知識は決して淺薄なものではなかつたのである。和漢の學がよく混和して、互に調和した爲に、和漢混交の文も生れたのである。漢學の項に説いた徂徠までの諸學者は、みな漢學者の名を以て許すべきであるが、なほその一面には、教義を平民化し普遍化せしめんとして、多くの和漢混和體の文章による著述があらはれて居る。その中に最も優れたものは。

貝原益軒 新井白石 室鳩巢

の三人であらう。

十一、貝原益軒 新井白石 室鳩巢

(一)貝原益軒 の特長は達見を銜ふことなく、淺近を旨とし、實用を主として、諄々

説いて倦まず、不易を以て人の心に深く入らしめんとした所にある。其の著、

大和俗訓 家道訓 初學訓 文訓 武訓

などは、修道の要を説いたものであるが、このほか諸國の地理を通俗的に示したものに吾孀路記 大和廻 岐蘇路之記などもあつて、益軒は、難解の理論を、當時の婦女子をしてもなほ了解し易からしめたほどの功勞者である。

(二)新井白石 白石に至つては、當時國民の一般の自覺心を代表するといひ得るので、摸擬踏襲を潔しとしなかつた意氣に乗じて、國史を究むれば識見卓絶、國文を綴れば古今無雙、その他考證に、語學に、行くとして可ならざるなしといふ、稀に見る文と學とを兼備した傑物である。

白石は號、名を君美といふ。家宣、家繼の二代に歴仕して帷幄に參したが、かの儒臣林鳳岡と論が合はず、屢々臺閣の上に論戰して、八代將軍吉宗の立つに及んで、遂に斥けられた。白石の一生は、勿論政治の上に於ても、其の功勞尠からざるものがあ

つたのであるが、吾々はその著した大部の書物を通じて、面目を窺ふ時に、白石の多角的な才藝に、驚かざるを得ないのである。先づ、

采覽異言 西洋紀聞

の二書は西歐の事情を究めて洋學の先鞭をつけ、

本朝軍器考 車輿考 冠服考

は、有職故實の學に、

東雅 同文通考

は、漢字假名を論じて國語の性質を説き、

古史通 讀史余論

は、古今の歴史を論じて、卓見を述べて居る。就中「古史通」は神代の史論であつて、神名地名の考證から、古言に通せずしては、到底その時代を明らかにする事は出来ないとい説いて、古事記研究の必要を説いた點などは、後の國學勃興に先立つて居る事

で、その識見の凡ならざる事に驚かされるのである。「讀史餘論」は將軍の前に古今の成敗を論じた時の稿本であるといふ事であるが、頼山陽の日本外史は、そのうちの史論は、たゞこの書の糟粕を嘗めたものに過ぎないとの評さへある。

白石の文學的作物に

藩翰譜 折焚く柴の記

がある。藩翰譜は諸侯の系譜を記し、その履歴を列叙したものであるが、中に勇士奇傑の逸話を挿んで人物を活動せしめ、無味乾燥の記事に光彩を放つた所は凡手のよくする所ではない。「折焚く柴の記」は白石自家の傳である。藩翰譜に比して、やゝ雅致の點に滂つた傾があつて、その優麗流暢は、今日も範とすべきものがある。

藩翰譜（本多作左衛門）

一説に同じき廿日、關白殿、駿河の國府の城に入り給ふ時、徳川殿、長久手御陣より参り給ひ、御對面の儀あり。重次此所に参りて、關白殿御家人數多並みたる所にて、徳川殿の御後より参りて、立ちたばかり、大きに聲を怒らし「やあ殿よ殿。あつばれ不思議を振舞ひ給ふよ。國

をも保たんず人が我住む城を打明けて、暫くも人に借す事やある。其掟にては、人のからんこいはんには、一定北の方をもち給はんずるよな。かし給はんずるよな」云り言り立ち歸る。徳川殿人々に打向ひ給ひ「今の老人が申したるを聞き給ひてこそ候ふらめ。あの老人申すは、本多作左衛門重次にて、家康累代の家人、家康の幼きより仕へぬ。年若き頃より、弓矢こつては人々にも知られ候ひしか、今は見給ひし様に、年もいたう寄つて候ふ。されば家康も不便の者に存ずさいへ共、天性我まゝの根性にて、人をば人とも思はず、人々の聞き給ふ所にただにかく家康をこまがましく申す、まして只二人うち向うたる時の事、思ひやり給ふべし。常はいかにも候ひなん。いかでけふしもかゝる奇怪をば振舞ふべき。人々の思ひ給はん所恥しう候」云仰せければ、ありあふ人々一同に、「此人の事久しく承り及ぶさいへ共、見及びしは、今こそ始なれ。誠に聞きしにまさりて候ふものかな。事新しう候へども、かかる御家人の候ふ事、おくゆかしう覺えて候ふ」云式代せしさいふ。按ずるに、重次海道の諸城修理の奉行たり。此城かし給ふ事、いかで知らざるべき。然るにかく京家の人々の集りし所にて、思ふやうにいひ散したる事、まことにさる智深き人なり。重次にあらずしては及ぶまじ。さればこの説誤る

べからざるにや。

これを讀めば、今日の普通文——漢字交り文——は、此の期にその體をなした事に、誰も氣付くであらう。

白石の幕府を退くに當つて、その推舉により儒員となつて吉宗將軍に仕へたのが、室鳩巢である。

(三)室鳩巢は名を直清といひ、木下順菴の高弟で、江戸駿河臺に住した所から、駿臺先生といはれた。その著、

駿臺雜話

は老後病間の隨筆。

鳩巢小説

はおもに白石との談話を記したものである。共に和漢の故事を引用して、文體莊麗かつ謹嚴、而も興味の津々として盡きないものがある。

駿臺雜話(老僧が接木)

忍が岡のあなた、谷中の里に、何がしの院にてひみつゝの眞言寺あり。翁幼かりし頃、其住僧を知りて、しばしば寺に行きつゝ、木の實ひろひなきして遊びしが、經僧かたへの人に向ひて、前住の時の事なん語りしをき、侍りしに、寛永のころの事になん、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、御かちにて、こゝやかしこ御過がてに御覽ましましてけるが、此寺へもおもへず渡御ありしに、折ふし其の時の住僧はや八旬に及びて、庭に出て、みつわくみつゝ、手つから接木して居けるが、御供の人々おくれ奉りて、御側に二人三人つき奉りしを、中々やんごみなき御事をば思ひもよらねば、其背き居たりしを、房主なにする事ぞご仰られしを、老僧心にあやしき思ひて、いごはしたなく接木するよご御いらへ申せしかば、御わらひありて、老僧が年にて今接木したりごも、其木の大きくなるまでの命も知れがたし、それにさやうに心をつくす事ふようなるぞご上意ありしかば、老僧御身は誰人なれば、かく心なき事を聞ゆるものかな。よくおもうて見給へ。今此木もつぎておきなば、後住の代に至りて、いづれも大きになりぬべし。然れば、林もしげり、寺も黒みなんご、我は寺の爲をおもひてする事なり。あながちに我一代に限るべき事かはいひしをきこしめして、老僧が申すごご實にも理なれご御感ありけり。そ

の程に御供の人々おひおひ來りつゝ、御紋の御物さも多くつぎひしかば、老僧それに心得て、大きにおそれ奥へにげ入りしを、御めし出しありて、物なき賜りけるになん。いま、翁も、此老僧が接木する如く、老い朽ぬれども、ある限りは舊學を究めて、人にも傳へ、書にも残して、後世に至りて、正學の開くる端にもなり、此道のために萬一の助さもなりなば、翁死しても猶いけるが如し。古人のいはゆる死しても骨朽ちじこいひしこそ思ひあたり侍れ。いさゝか我身のために謀るにあらず。諸君も翁がこの心を信じ給へかし。

このほか、柳澤淇園の「雲萍雜誌」も同様の文で、湯淺常山の「常山紀談」橋南谿の「東西遊記」、菅茶山の「筆のすさび」、成島司直の「徳川實記附録」、藤田東湖の「常陸帶」、伴蒿蹊の「近世畸人傳」「閑田耕筆」、富士谷成章の「北邊隨筆」、山崎美成の「名家略傳」、瀧澤馬琴の「玄同放言」などは、いづれもこの和漢混和文の類に屬するものである。

十二、國學四大人

(一) 荷田春滿の、

ふみわけよ やまこにはあらね 唐鳥の あまを見るのみ 人は道かは

といふ詠は、實に當時一世を風靡した漢學に反抗して、こゝに勃然起つた新しい氣運國學の主張そのものをあらはすものである。これ、はた 元祿の自信自覺、模倣を事としない風潮の然らしめたもので、外國必ずしもよからず、我が邦にはまた我が邦の美風あり、須らく古を究めて、その純なるものに歸れと、叫ばしめたのであらう。春滿は京都に國學校を起さうとして、その建白書風のことを草したといふほどで、水戸侯が大日本史編纂の擧も、等しくこの風潮を語り、國體の美を發揚して國を守らんとする愛國心のあらはれである。春滿は幼時古典の學を好んで、制度、格式、有職故實、國史、國文などを修めたのであるが、その識見は堂上の儕輩とは全く別で、歌文の道が漸く衰頹して、或は淫蕩に流れ、純樸の風、地を拂ふ有様となつたのを慨し、一人時流に超越して高く嘯いた觀がある。その生涯を通じて、戀歌は一首も詠まな

つたといふ話は、以てその人格の一端を窺ひ知る事が出来るのである。春滿には著書も多くあつたのであるが、彼は其の歿前凡てこれを焼棄てたといはれて居る。今日たまたま残存するものも、實際焼却の迹を存するもので、彼が時流に合はず、多感慷慨の學者であつた事を思はせる。其の門に賀茂眞淵が出て、爾後國學の事は榮えに榮え、遂に春滿の名は永世に朽ちざることとなつた。

(二)賀茂眞淵 眞淵の生地は京都でもなく、又江戸でもなく、その中間遠江である。春滿に學んだ後、一旦郷に歸つたが、更に江戸に出て、その卓見を講演したから、門下も多く、一時江戸城下の大評判となつた。幕府は奥力加藤枝直をして、その學説を問はしめた程であつたが、枝直はその説に感服措かず、宅を構へてこれを迎へ、その子千蔭を入門せしめて、自ら師友として深く交るに至つた。このやうな次第で眞淵の名聲は一時に高く、春滿の子在滿の推薦によつて、田安宗武に仕へ、生涯江戸に寓して著述に講説に、専ら國學の研究に身を捧げた。

眞淵生涯の目的は、佛儒二教によつて平安朝以來の人心が本來自然の眞情を汚されたのを慨いて、古の眞と純とに歸さんとするにあつた。そして先づその階級としてはどうしても古文の研究、古語の解釋に著手しなければならなかつたのである。しかも當時既にこれらの古文は自由に解する事が出来なくなつて居たのであるから、眞淵の苦心もまた思ふべきである。眞淵の著書には、

冠辭考 萬葉考 祝詞考

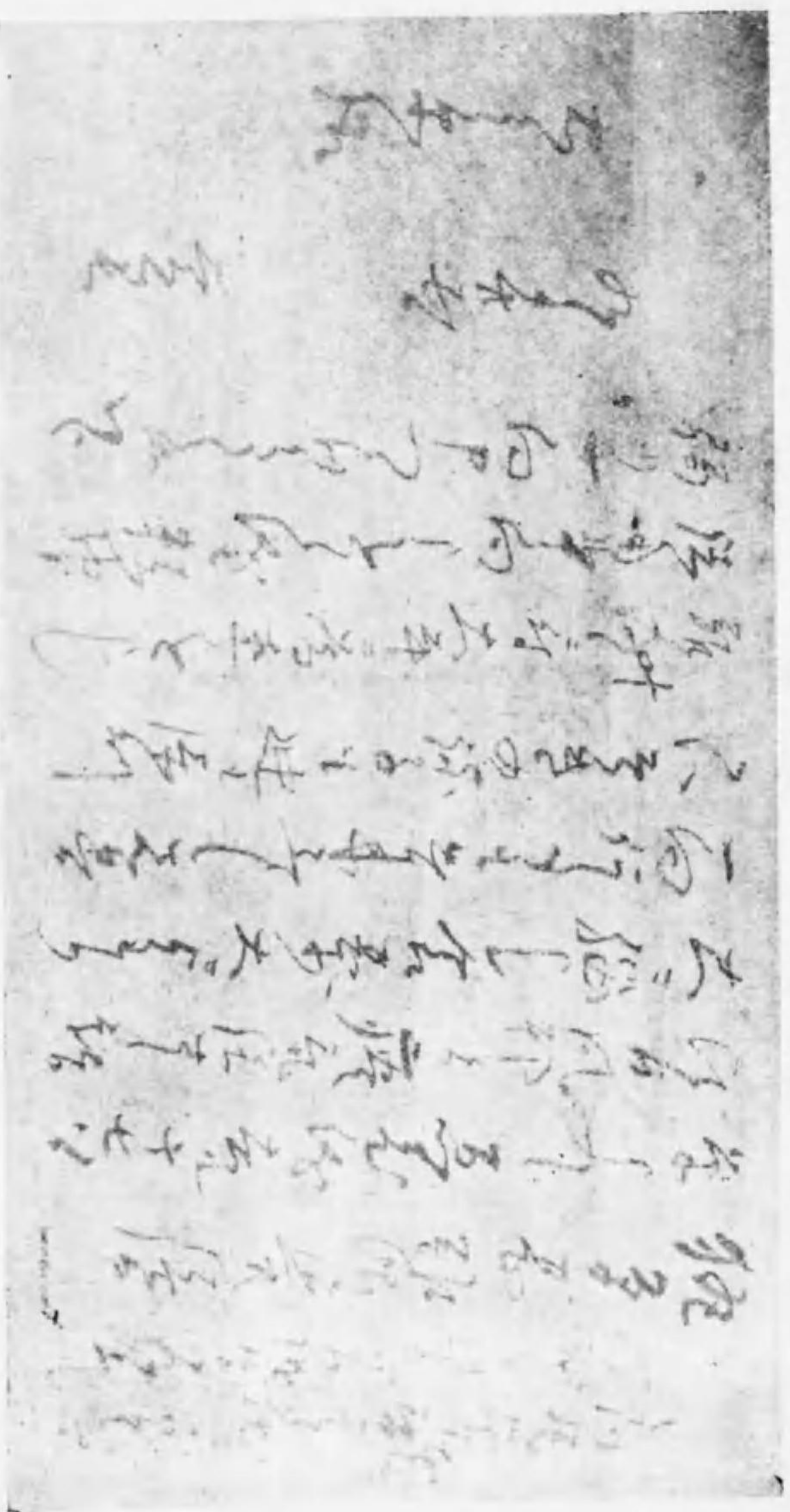
其のほか古文學の評釋が澤山ある。何れも先人未發の卓見が見られるが、畢竟眞淵は一生をこの手段に終つてしまつて、今一步深く古の眞と純とを明らかにする事は、出来なかつたのである。然し乍ら國學の途は益々開けて、眞淵の熱心は宣長を感動せしめ、その晩年ゆくりなくも伊勢松坂の宿に古事記研究の要を説いたのが、後年本居宣長をして古事記傳の大著をなさしめた事になつたのである。

(三)本居宣長 は、伊勢松坂の人、醫を以て業としたのであるが、眞淵の徳に應じて

三十五歳の時から古事記の研究に身を投じ、實に三十五年間の苦心を経て、四十八卷の古事記傳を作成した。

古事記は神代以來の傳説と歴史とである事は、既に説いた所である。宣長の研究は文辭の攻究に一步を進めて、神ながらの道を明らかにし、神代は近代の思想を以ては到底理解し難いものが多い、淺薄な人間の智識を以ては、天地と共に大きな神意を量る事は出来ない、唯仰いで以て信すれば足れりと説いたのである。理性の知るべからざる所は、これを信仰に待つといふ主張は、多少學術的研究を離れて宗教のひらめきがあつた事を窺はしめる。これが因をなしてこの後各方面に所謂宗教的の神道といふものが起つて來たのであるが、宣長の研究の態度は、あくまでも純學者的で、その古書に對する時は、博く探つて立證盡さざるなく、諸説の異同を綿密に辯じて、最後に歸納的斷案を下す所は、未だ嘗て見る事の出来なかつた用意周到の論法で、その論據の堅實さは、やがてかしこき神の道を説くに最もふさはしいものであつた。

(寛文松屋) 筆 總 の 長 宣 屋 本



儒學と佛學とのほかには、思索的方面の何ものもなかつた時代に、この神ながらの道が稱へられたのであるから、宣長の名は奥羽九州の果までも高く轟いて、門下に來り投ずるものも夥しく、諸侯はもとより宣長を招聘して止まなかつたが、悉く辭して専心攻學につとめた。門下に秀才は許多あつたが、就中優れたのが平田篤胤である。

(四) 平田篤胤 篤胤は宣長歿後の門人であるが、深く師の道に敬服して、その性の剛毅果斷であるのにつれて、勇猛精進、一身を挺して斯道の宣傳につとめた勢は幕末の見ものであつた。

篤胤は舊來の神道が、漸次外教の影響を蒙つて來たのを察して、先づ祭神の儀式に純日本風のを制定し、所謂平田派の神道を起して、これを基本に、二千年來百般の事物に被り來つた外來思想を一掃し、國民はこゝに覺醒一番せざるべからずと叫んだのである。愛國の心はこの叫と共に起る思想であつて、一轉勤王の精神となり、再轉討幕の擧となつたのである。であるから明治の革新は百年の昔、既にこれら國學者

の夢裡に往來した所で、そこに養つた思想は、維新前後の志士の頭に熟して居たのである。春滿、眞淵、宣長、篤胤を稱して國學の四大人といふ。

十三、古典の研究

國學及び神道が古典の研究から出た事は、既に述べたが、徳川の世を通じて、古文の研究が盛であつた事は、實に前代未聞、さかんに奈良朝以來の文詞の解釋に意を注ぎ、名著相次いで世に出たのであつたが、この方面の第一人者は釋契沖である。

契沖は眞言宗の僧侶で、そのはじめ高野山に登つて學行を修め、兩部大阿闍梨の僧位を得たが、後大阪の高津に居をトして、庵を圓珠庵と稱へた。佛書の外、國書を好んで深くその蘊奥を究めたのであるが、契沖をして不朽の名をなさしめたものは、

萬葉代匠記

の著である。代匠といふのは、嘗て下河邊長流が水戸侯の依頼を受けて萬葉集の註釋をすべきであつたが、長流が、その業の及ばざる事を知つて、時の大家契沖を推舉

し、契沖は長流の高風と、水戸侯の恩顧とに感じて、萬葉の研究に没頭し遂にその業を終へて、水戸侯に献じたから出た名である。梨壺に萬葉集の研究があつた事は、歴史にあるが、その成績は傳はらず、當時にかけはなれた詞藻を読み解く契沖の苦心は、實に如何ばかりであつたらう。契沖が眞言宗の僧侶であつた事は、自ら梵語に精しく、音韻の學理に通じて古語解釋の上に多大の便宜があつたのであらう。その著「和字正濫抄」の如きも國語學上の名著として、今日なほその餘德を受けて居るのである。そのほか、

古今餘材抄 勢語臆斷 源註拾遺 百人一首改觀抄 厚顔抄

などもあつて、平安朝時代の文學は契沖よつて、釋明されたものが多い。

契沖の大阪にあると相對して、江戸に古文辭の註釋に力めたものは、北村季吟である。季吟はそのはじめ京都に住んで、松永貞徳のもとにあつたのであるが、後幕府に召されて江戸に下り、和學所の長となつて法印に任せられた。その博覽多識は五十

餘種に及んだ著書に窺ひ知る事が出来るので、説明精細、後世を裨益するものが少ない。

源氏物語湖月抄 枕草子春曙抄 徒然草文段抄 萬葉拾穂抄 和漢朗詠集註

などはその重なるものである。季吟の事業は血あり涙ある創作の事とは、全くかけ離れて居るものではある。しかし想像を驅せて自在の筆を走らすものは、これ才氣。これは用意周密、博く探つて徐に筆を執る所の學術。一は猪突、一は保守。この兩者相俟つて、はじめて文化の圓滿な發達があるのである。天性の文學と綿密な研究とは、決してその價值を云々すべきものではあるまい。

契沖季吟によつて著手せられたこの古典研究は、その後の國學者によつて益々攻究を深め、眞淵には、

萬葉考 源氏物語新釋 伊勢物語古意 古今集打聽 大和物語直解
百人一首初學

宣長には、

萬葉集玉の小琴 源氏物語玉の小櫛 古今集遠鏡 美濃の家づと 大祓詞後釋

歷朝詔詞解

などがある。これらは皆當時の代表的著述であるが、その解釋する所は、多く萬葉、古今、源氏、伊勢等のほかに出でないのは、如何にこれらの文學が國民の心と離るべからざるものであつたかがわかるであらう。なほ研究そのものではないが、後に至つて塙保巳一が群書類從編纂の大擧も決して見逃すべからざるもので、その動機は正にこれらの氣運の然らしめた所による。

十四、雅文

古典の研究は國學の隆盛を來たしたと同時に、一方復古的精神に基いて、こゝに文章そのもの、復古を稱へて中古の語法文脈を學び、これを基として文を綴つた所謂雅文を見るに至つた。蓋し漢學に古文辭學派を生じて、その文辭を綴つたに似て居

る。契沖以來既にこの風が無いのではなかつたが、殊に文辭一方に傾いたのは、京阪の文運東漸して江戸に移つた明和頃以後である。その主なる作家に 上田秋成 村田春海 橘千蔭 などがある。

秋成は京阪に出で、春海、千蔭の江戸にあるに對し東西相應じて優雅の文に一世を風靡せしめた。これは明治の代にも及んで、婦人はこの種の文章を綴るを常とし、又奨勵教授せられたものである。

村田 春海 琴後集

橘 千蔭 うけらが花

上田 秋成 藤篋冊子つばらばな

伴 蒿 蹊 閑田文章

松平 定信 花月草紙

藤井 高尙 松の屋文集

中島 廣足 樞園文集

清水 濱臣 泊酒舎集

などは皆同一系統に屬する文體である。今春海の琴後集からその一例を掲げる。

伴蒿蹊のもこにおくる

秋の日數も残少うなりにたるを、都の御住居よ、いかに明し暮し給ふぞ。この武藏の海はたは
大方山いこ遙にて、露霜の心おそき習に侍れば、立田姫のすさびも、はかばかしうも侍らずな
ん。さるは都の空のみ、ゆかしう思ひやられ侍るが中に、まして塵にそみ給はぬあたりは、何
の山里、くれの古寺、御心ゆく方ぞ多かりなん

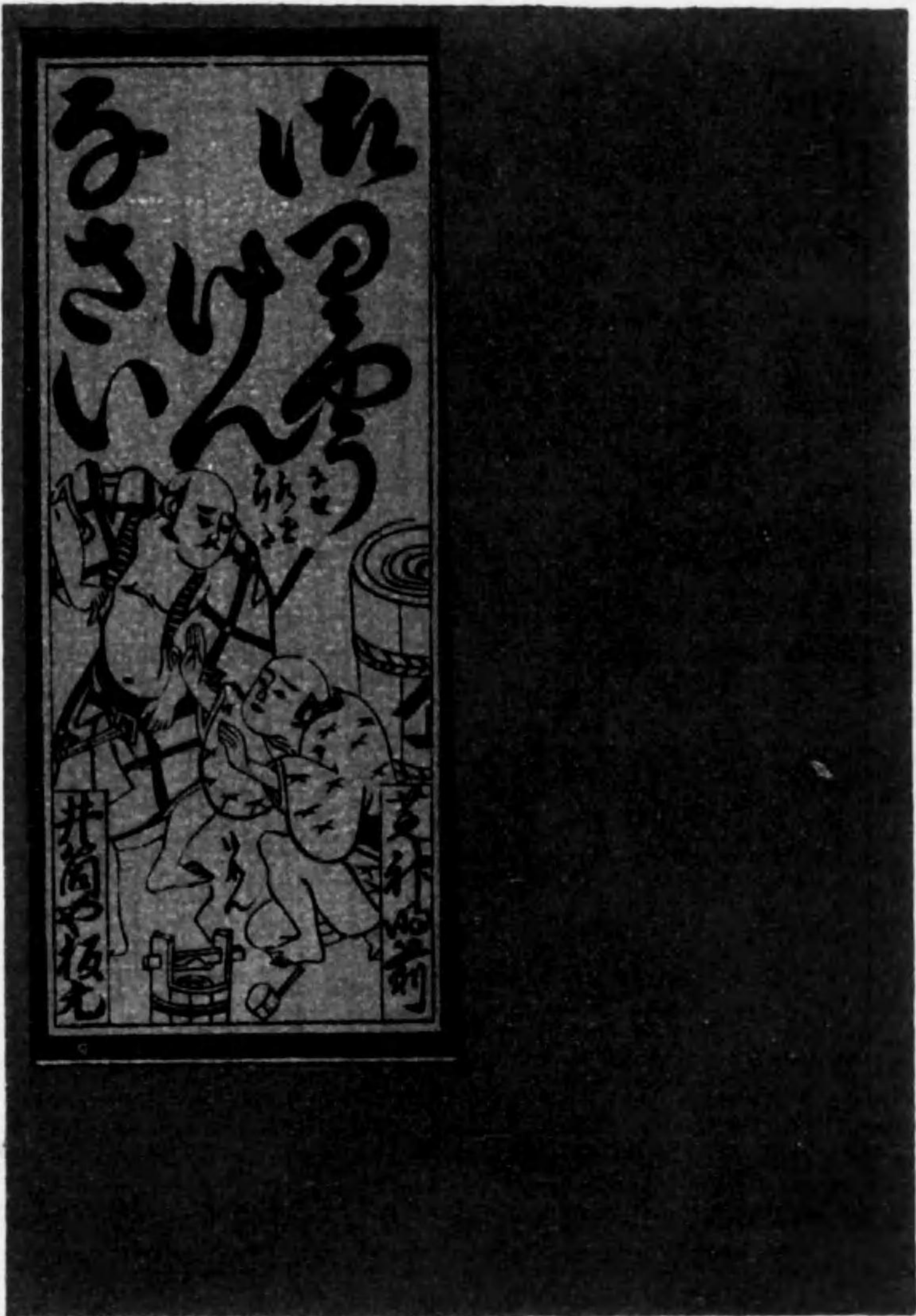
都人 いづれの山の 錦をか 詞の色に たぐへては見る

此ごろは御手染のめづらかならんこそおほからめ。風の便を忘れ給はて示し給はば、下照蔭に
こもなはれ侍らんこ、ちせんは、うれしきわざなるべし。立つ霧にな隔て給ひそ。

十五、小説

赤本

赤本

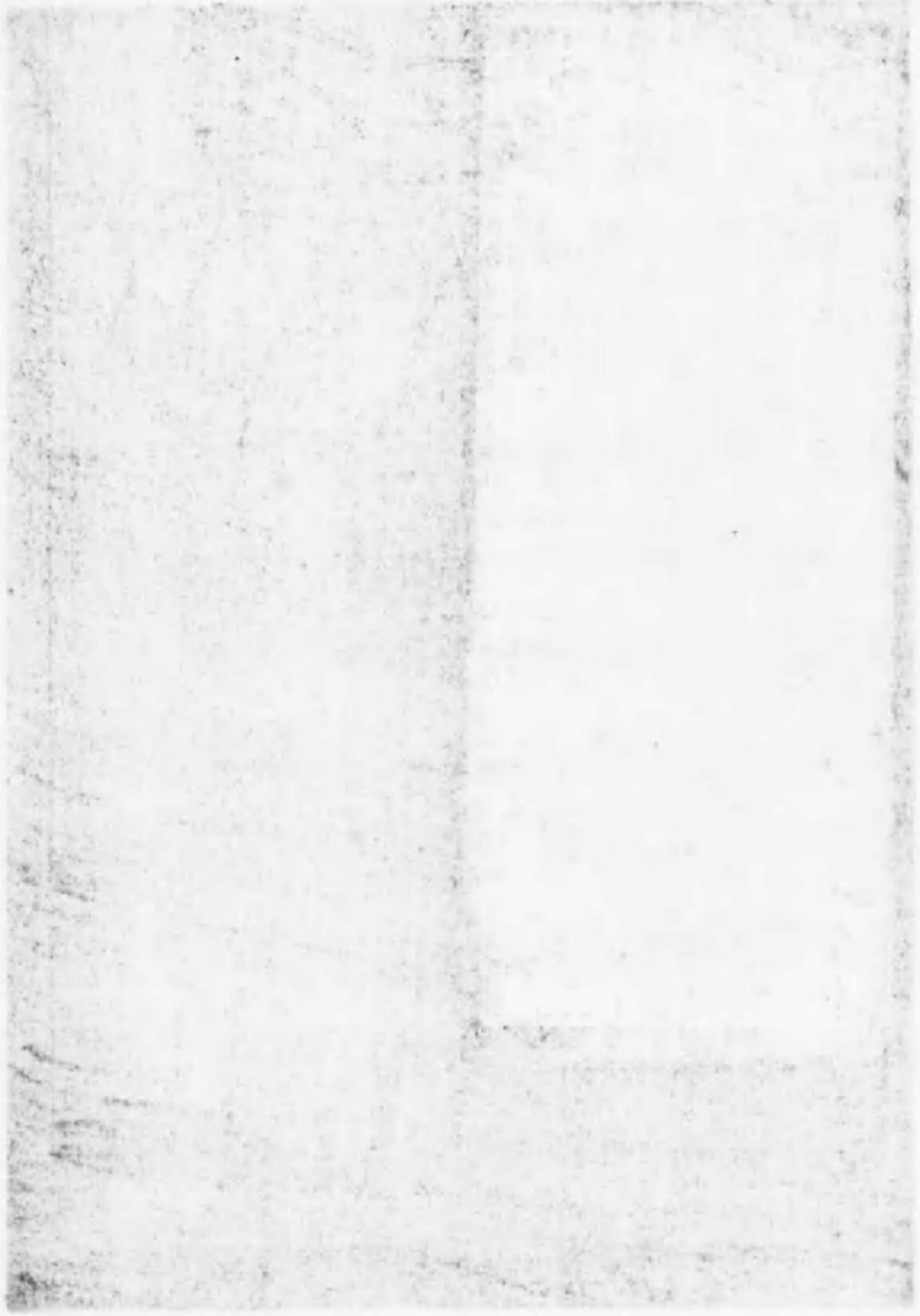


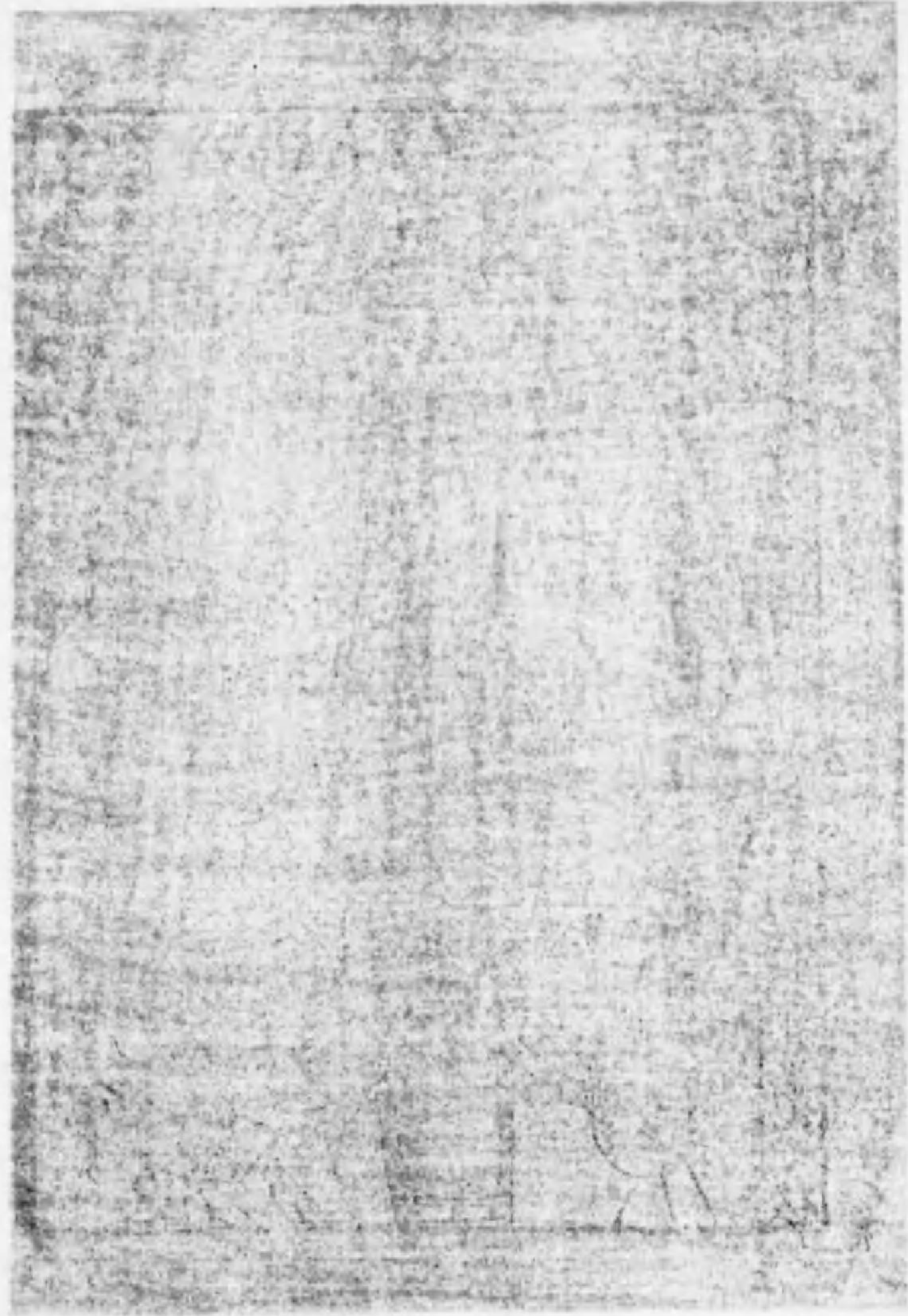
(江戸物語による)

赤本



(江戸物語による)





徳川幕府時代の特長が、平民文學の勃興にある事は既に述べた。韻文——歌謠——のもとに淨瑠璃があつた如く、散文のもとには各種の假作物語が平民の間にはあらはれて、その分量をいへば實に此期文學の半以上を占むるといふも差支ないほどである。これらを總稱してこゝに小説と呼ぶ。その種類は時代により形式により内容により、

假名草子 浮世草子 赤本 黒本 黄表紙 讀本 洒落本 草双紙 滑稽本
人情本

などに區別される。何れも卑近の事象に題材をとつて、多く俗語を用ゐて居るが、文學の生命、生活描寫の妙味は、却つて前時代から繼承した物語風のものに優り、武士の壓迫に堪へきれない鬱勃たる當時の空氣は、よくこの小説の上に窺ふ事が出来る。假名草子は、その最も初にあらはれたもので、室町時代のお伽草子から一步を進めたに過ぎず、相去る事甚だ遠くないものである。和漢の古書に見えた珍説異聞を翻案して、娛樂の爲、一には教訓の爲に、平易な假名文を以て綴つたもので、いまだ純文

學として獨立せず、倫理書・地理書などの小説化したものと見た方がよいであらう。

如 備 子 可笑記 百八町記

山岡 元隣 誰が身の上 小さかづき

鈴木 正三 二人比丘尼 因果物語

浅井 了意 東海道名所記 お伽婢子 浮世物語

中川 喜雲 京童

などが、そのおもなものである。

十六、井原西鶴

元祿前後の平民は、凡て現代を謳歌して、古代の憧憬を事としない。現實に甘んじて、過去を追想する暇が無かつたのである。平安朝に、「今様」といふ詞があつたと同じく、この當時「浮世」といふ詞が流行した。その趣は多少違ふであらうが、これ即ち現世を樂み、過去も未來も何のその、一生を面白をかしく暮せば、以て足れりとし

た傾向をあらはす詞である。浮世繪といふものもこの頃から起つた。同じ意味を以てこゝに云はうとする、元祿の寫實小説浮世草子も、あらはれたのである。そして、その作家の第一は井原西鶴である。

西鶴は大阪の人で、俳諧を西山宗因に學び、壇林の高足であつたが、繁雜な都會に住んで、もとより花鳥風月を友とする事は出來ず、而も心に秘められた勃々たる文才は到底抑ふるに由なく、果然市井そのもの、混雜そのものに向つて、彼の慧眼は投せられたのである。かくて人の心の祕密と風俗の真相とが對象となつて、西鶴の小説はあらはれた。西鶴の處女作は天和二年の「好色一代男」であるが、これが、わが國の小説史上に特色を出したもので、自然主義、現世主義が、ひらめき出されたのである。西鶴の描いた世界は、初期に於ては戀愛を主とし、中期、武士を材とし、後期に至つて、町人の社會を對象として、その主な作品には、好色物として、

好色一代男 好色一代女 好色五人女 男色大鑑

武家物には、

武道傳來記 武家義理物語

町人物としては、

日本永代藏 世間胸算用

などがあるが、西鶴の西鶴たる所は、實にその戀愛描寫と世相描寫とにあるのであつて、自己の想像を加へずに、僞らず、飾らず、極端なる直寫を平氣でやつてのけた所に、見所があるのである。道德を以て律せんとするのは、穩健な爲政の要である。而も人情は變轉極りなく、はかり知るべからざるものゝ存するを如何ともする事は出來ぬ。

西鶴研究の参考書には、

鈴木敏也

西鶴の新研究

木崎愛吉

西鶴研究

岡野美二二

西鶴好色物全釋

などがある。

西鶴の後に出了た浮世草子の作者と著作とを擧げると、

北條 團水 晝夜用心記 日本新永代藏 本朝智惠鑑

月 尋 堂 今様二十四孝 鎌倉比事 世間用心記

西澤 一風 傾城武道櫻 後室色縮緬 亂脛三本鍵

錦 文 流 棠大門屋敷 熊谷女編笠

などがあつて、脚色結構の點にやゝ變つたところを見せては居るものゝ、概して云へばいづれも西鶴の系統を受けて、たゞその糟粕を嘗めたに過ぎない。

浮世草子の流行につれて、西鶴物から出て一特色を有し、或る勢力を見せたのは八文字屋本である。これは寶永・享保の頃、京都の書肆八文字屋自笑が、作者江島其磧と結んではじめたもので、その署名は自笑とあるが實は殆ど其磧の手に成つたもの、自笑はたゞその一部を補助したといふに過ぎぬ。従つて八文字屋本の名が高くなるに及んで、其磧は一旦自笑と分離して獨立したが、成功せず、後また自笑と結んで兩者合作の名のもとに版行した。その作には傾城色三味線をはじめ、世間息子氣質 世間娘氣

質などがある。其殞の死後、多田南嶺が之に代つて鎌倉諸藝袖日記などを書き、この頃から八文字屋本の作風が一變したが、これは一面にはその衰微を語ると共に、他面に於ては「讀み本」への過程をあらはしたものである。

十七、山東京傳

京阪の文運極まつて、大江戸の町人が今度は獨特の潜勢力を草双紙にあらはした。草双紙の最初は元祿に源を發して、お伽草紙の題材から文正、桃太郎、かちかち山をはじめ、在來の傳説に兒童を相手として、其の名も赤本と稱したが、安永四年戀川春町の「金々先生榮華夢」が出るに及んで、風體一轉、當時の人情風俗を描いて、大人の讀物となつた。赤本は黒本 青本 黄表紙と進んで別に洒落本を生み、口語をそのままに寫して、江戸時代中期後の町人生活が手にごるやうに見られる。これから尙進んで所謂讀本が出る事になるのであるが、その間に出了たのが山東庵京傳である。

京傳は姓岩瀬氏名は醒、そのはじめ青本に筆を執つて居たのであるが、段々洒落本に

紙表(紙表黄)夢花榮生先々金作町春川辯



うつり、「合子洞房」をはじめとして、

客衆肝照子 通言總籙 吉原楊子

など多数の作を發表して、洒落本の大立物として非常な評判を受けた。けれども、時恰も幕府では松平定信が臺閣に立つて新政を布いた頃であつたので、風教に害ありとして洒落本は禁止せられたのであつたが、京傳はその翌寛政三年に「仕懸文庫」その他を出して手鎖五十日の刑に處せられ、この事あつて以來京傳は洒落本に筆を絶つた。

この頃馬琴は京傳の門にあつて、その代作などをして居たのであるが、京傳が刑後讀本に筆を執り出した頃は、馬琴もまた頭角をあらはして、京傳は在來の名聲に、馬琴は新進氣鋭の才を以て、互に相競ぶに至つた。この有様は當時の一偉觀であつて、文壇はいやが上にも人氣を呼んだのである。けれども、京傳の舞臺は到底讀本の範圍にはなく、滑稽を主とし寫實を旨とした短篇の青本・洒落本の方に彼の價值が認めら

れるのである。

十八、瀧澤馬琴

本名は解。著作堂主人、蓑笠漁隱、玄同陳人などと號した。醫術儒學などを學んだ事もあるが、壯年の頃から讀書を好んで精勵刻苦、遂に讀本に筆を染めて、其の著はす所二百六十種、晩年眼疾をやんで明を失するに至つても、なほ著作の筆をやめなかつたといふ精力家である。

南總里見八犬傳 椿説弓張月 近世説美少年録 夢想兵衛胡蝶物語 三七全傳

南柯夢 俊寛僧都島物語 朝比奈巡島記

などは彼の傑作と稱せられるもので、誰も知る所であるが、これらを讀んで見ると彼の博覽強記には實に驚かされるのである。馬琴の小説が在來のものに比して異なる點は、所謂、勸善懲惡主義を以て進んだ事で、これは輕兆浮華な點こそないが、文中往々にして不自然にわたる所が多いのは、非難をまぬかれぬ所である。馬琴は、歴史小説を

以て最も得意とした。

南總里見八犬傳の一節（小文吾舟水を論ず）

引かれて對牛樓にうち登れば、常武は婢兒等に兩戸おちなく開かせたり。當下、小文吾は先づ頭を回らして、彼此見かへるに、樓上の東向には、僧一山が款印ある、對牛彈琴といふ四字の額を掲げて、左右には唐の王勃が蜀中九日の詩を白字に鏤りたる竹聯あり。時は今、夏、秋の違あれども、犬田が爲には、こゝも亦望卿の臺にして、北地よりくる鴻雁はなれどもいざ言こはんこ詠まれたる都鳥は今もありけり。かくて欄干に身を倚せて、つくづく見わたせば、天ははやあけし横雲の、色紙めきたるに筆はなれき、誰が硯せし墨田河、前面に黒き牛島は、宛も水に臥せるが如く、彼方に蒼き柳島は、絲よる濤に靡くに似たり。世間は何に譬へん朝びらき、趾なき加三滿誓が、詠みたる歌はしら波に、漁翁生涯一葉の舟、東へ漕ぐあり西に歌あり。葛西村落幾戸の烟、南に沖つあり、北に減ゆるあり。鎌田、浮田、行徳の浦々、あれかこぞ思ふ目も適に、登る旭をふる里の、方よし見れば、翁さびし、父のうへ又親戚のこゝ、胸に湛へてながらふる、かひこそなけれ劔刀、身を浮橋の中絶えし、この石濱の玉塵よ

り、數しつもれる艱難憂苦の、やるせは絶えてなかりけり。常武これを慰めて、犬田殿、々々々、いつまで物を思ひたまふぞ。尺蠖の伸びんこする時、まづその身を縮むこいへは、窮達時あり、運によるべし。あれあの船を見たまはずや、久しう水際に繋がれたるあり。又眞帆あげて走るあり。繋ぎし船は走るべからず、走る船は留りがたし。和殿が今の滞留も、只この理をもて悟るべし。これをわが上に譬へていはゞ、君は船なり、臣は水なり、水はよく船をうかべて又よく船を覆す。自胤は暗愚の弱將、菽麥をだに辯へ得ざれば、いかてか和殿を知るものならん。かの鄰國なる敵の爲に滅ぼされんこ疑なし。某も亦千葉の一族馬加光輝の姪なれば、代つて取るこも、誰か咎めん。されば享徳の例に倣うて、自胤に詰腹切らせ、わが兒鞍彌吾常尙を當城の主にせばやこ、思はざるにあらねども、いまだ智勇の軍師を得ず。和殿今よりわれを佐けて、事成る時は、葛西の中、半郡を宛て行ふべし。うけひかれんやこ、小膝を進めて、また他事もなく囁けば、小文吾聞きて貌を改め、こはおもひかけなき密儀を談ぜらるゝものかな。某素より學問せざれば、聖の教はよくも知らねど、譬を取りて利害を推さん。貴所は只水こ船この反覆を説きたまへども、順逆の理に暗きにあらずや。いかにこなれば、水の船を浮むるは

經つねなり。その船を覆すは變なり。苟しくも只その變を己が利として、その經つねを取らざるものは亂臣賊子の心なるべし。君臣禮あり、舟車に機あり、君臣禮を失ふときは、舟車に機を失ふが如し。一旦その利を得るといへとも、滅とせんとこと疑なし。古より臣として、その君を弑せしもの、誰かよくその久しきを保ちたる。希望こひねがくは非義の妄想を除き去りて、千葉家の諸葛といはれたまはと、徳誼後世に芳流して子孫餘慶を受くるとこあらん。某武藝を好めとも、短才にして文學なし。いかてか人の佐となるべき。只その志す所は、忠信の狗となるとも、亂離の人とならじとのみ念ずるの外は候はずと、憚る氣色もなく答へしかば、常武は勃然と怒は面に見はれても、手を叉きて物いはず。

讀本の外に、その系統に屬するもので、形の上からは黄表紙の性質をうけつといたものに、合巻と稱するものがある。柳亭種彦はその代表的作者で、

修紫田舎源氏

は最も著名の作。巧に源氏物語を翻案して、時代を平安朝から室町に移し、また文中

修紫田舎源氏(草双紙)表紙及卷末





の和歌の代りに俳句を入れて、當時の世相を輕妙な文章で寫し出してある。

そのほか、また人情本なるものもある。これは表面教訓を標榜してゐるものもあるが、實は人情をあらはすのが本旨で、従つて多くは淫蕩なる情的生活を寫したもので、その代表者は爲永春水、著作としては、

春色梅曆 いろは文庫

が名高い。しかし「いろは文庫」は二世春水の代作と稱せられる。

十九、滑稽文

韻文の滑稽的分子は狂歌と狂句とに見た所であるが、散文にも同じくこの種のものがある。作者は式亭三馬と十返舎一九であつて、この種の作を一般に滑稽本——中本——と稱する。

三馬は純江戸の町人、本名は菊池泰輔といふ。幼い時に書肆の丁稚となつたが、その間に讀んだ知識を基礎として戯作をはじめると至つた。頗る滑稽の想に富み、著作

も多くあるがその中、

浮世風呂 浮世床

は最も有名で、當時の生活が、あからさまに寫されて居る。

一九は、本名、重田貞一、駿河から江戸に出て、戯作に筆をとつた人で、その著、道中膝栗毛

は彌次喜多の名によつて、今もなほ普く知られて居るものである。

座頭の川わたり(膝栗毛)

夫より鹽井川さいふ所に至りけるに、昨日の雨つよくして橋落ちけるにや、行きかふ人みづから股引をこり、裾をまくり上げて爰を渡るに、彌次郎北八も、いざや引き連れて渡りなんごする折柄、京のぼりの座頭二人連、此川の歩渡なるこゝを聞きけるにや、一人の座頭、

犬市 もし川は膝ぎりもござりますかな

北八 さやう、さやう、しかし水が早いから、おめい方アあぶない、用心して渡んなせえ

犬市 ハテ水の音がよつぽき早い

こいひつ、石を拾ひ、川の中へ投げこんで考へ、

犬市 イヤこゝらがさうか浅いやうだ、コリヤ猿市、二人ながら脚絆をこるも面倒だ、お主若役におれをおぶつて渡れ

猿市 ハ、ハ、ずるい事をぬかすな、拳で渡らう、何でもまけた者がおぶつて渡るのだがよしか

犬市 こりや面白い、サアこい、さんなむめて

猿市 りやんごうさい、りやんごうさい

こ片手で拳をうちながら、兩方から左の手を出し、互に拳をうつ手を握り合ひ、

犬市 サア勝つたぞ、勝つたぞ、

猿市 エ、いまいました、そんならこの風呂敷包を、貴様一所にしよはつせえ、ソレよしか、サア來いサア來い

こ支度して、脊中を向ける。彌次郎これはありがたいと、猿市におぶされば、猿市は連の犬市

さ心得て、さつささ川へはいり、難なく向へ渡るさ、こなたの岸に残りたる犬市、

犬市 オイ猿よ、さうする、早く川を渡さぬか、

猿市向の岸にて聞きつけ腹を立て

猿市 コリヤじやうだんな奴だ、たつた今おぶつて渡したに又そつちへ行つておれを撈るな

犬市 馬鹿いへ、おのればかり渡つて、太い奴だ、

猿市 太いさはそつちの事だ、

犬市 コリヤおのれ兄弟子に向つて、言語道斷な、早く来て渡さぬか

さ白い眼をむき出し腹立てる故、猿市仕方なく、又こちらへ渡りて歸り

猿市 サアそんならおぶさりなさろ

さ背中を出す。北八しめたさ手をかけておぶされれば、猿市又サツサさ川へはいる。犬市は大きにせきこみて、

犬市 コレ猿市さここにをる

猿市、川中のにて、

猿市 イヤこいつは誰だ

さ北八を川の中へさんぶりおさす、

北八 オイ助けてくれ、助けてくれ

さ手足をもがき流るゝゆゑ、彌次郎さびこみ引き上げれば、頭から骨までくさる程ぬれ、

北八 エ、座頭めが、さんだ目にあはしあかつた

彌次 ハ、ハ、ハ、まづ着物を脱ぎやれ、絞つてやらう

北八 全體彌次さんがわるい、何のおぶさらずさもいゝ事に、お前が手本を出したから、
イおれも

彌次 川へはまつたか、氣の毒な、ハ、ハ、ハ、ハ、それて一首やらかした
はまりけり 眼のなき人さ 悔りて むくいは早き 川の流に

この外に、

瀧亭 鯉丈 花暦八笑人 滑稽和合人

梅亭 金鷲 妙竹林話七偏人

なごもあるが、その滑稽に、一九、三馬ほどの自然味がない。

滑稽文としては、なほ狂文と稱する一體がある。これは風來山人、手柄岡持、蜀山人など、狂歌狂句を作つた人が、同様の趣味を以て綴つたものである。

風來 山人 六々部集

蜀 山 人 四方のあか 四方の留粕

手柄 岡持 我おもしろ

宿屋 飯盛 あづまなまり

なごのうち次に一例を掲げよう。

四方の留粕(筆はじめ)

春は曙、やうやう懸取りを戻してより、雑煮の餅も咽につまらず祝ひ、銀燭三詩に作れば、子細らしけれき、古行燈のしの田づまこも化けさうなを、はしごの下にかたよせ、やぶれ障子はればれと掃出すべきを、元日なれば帚もこらず。陳子昂が福如東海をかきし掛物、目ざしのむ

きみ馬鹿がたけれきも、初春の延喜を祝ひて、あやしき三尺の付床にさらりこかけ、伊豫籠は却て巻あげたる庭の景色そゞろここの浮み出るを、試筆こかいひて、したりがほに書きつけたるも、大つもごりのくるしさを忘るゝに似て、炬燵辨慶みや笑はれんこをかし。されば清女がすさみも、狭衣の發語も、少年の春をめでざるはなく、いつもうれしき正月心に、願はくば二十年あこへ猿江りのここくすべりかへれこ、我のみおもふかも。

x x x x x

要するに徳川期の文學は、過去の研究と共に、復古の文學があり、また一方に現代主義の新興文學があつたといひ得る。而して前者は、所謂學者の間に、後者は町人の間にあつた。奈良・平安朝の文學が鎌倉室町の一時代を過ぎた徳川期に研究せられたやうに徳川の文學は、まだ吾々にはあまりに近すぎる爲か、その研究といふものは餘り進んで居らぬ。然し乍らその内容はこゝに見て來た通り、頗る豊富なものであるから、その研究も頗る興味あるものであり、將來益々發展する事であらう。

第七章 明治大正時代

一、明治維新

我が邦の歴史を顧みると、凡そ三四百年毎に新思想が勃興して、舊世界を破壊し、その骨で新しかつた思想は、更に又、より新しいものによつて破られて居るやうに思はれる。幕末に輸入された海外思潮の影響は、復古精神の鼓吹と相應じて、尊王攘夷となり、一轉して王政開國となつた。賴朝が幕府を開いてから七百年の武家政治といはず、なほ遡つて藤原氏が政治上の實權を握るやうになつてから一千年の歴史は、こゝに全く破られて、再び王政の復古を見たのであるから、前時代のはじめに家康が同形式の幕府を開いたものは、甚だしくその趣を異にしてゐる。而もその江戸の開府にすら、既に民心の新なるを見たのであるから、明治の維新に國民の思想が大きな變轉をして、新しきに向ふのは、これ蓋し當然の事で、自然の勢、時代の流、止むべ

からざるものがあつたのである。加ふるに、これまでの新時代とは違つて、二千年來未だ嘗て知らなかつた西洋文明に接したのであるから、その影響もまた従つて大きく、忽ちにして四民の階級は撤せられ、結髪を切り、帯刀解き、袴は洋服にと、あらゆる舊い文物制度風俗習慣は、恰も疾風の過ぎ行く勢を以てすべてが改革せられたのである。まことに維新後の暫時は、全く西洋文明心醉時代で、物質界に於ける泰西文明は瞬く間に我が邦に入つて來た。

革新は、先づ破壊がなければならぬ。明治元年三月、五箇條の詔勅を下し給うたうち、

舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ

と遊ばされたのは、即ちこれで、當時の壯年者の意氣は、これを以て未曾有の大革新を成し遂げたのである。かくて政治の組織は一變し、廢藩置縣は幾多の困難を排して斷行せられた。まことに明治初年の國民の努力は、一に舊を棄て、新を取るといふ

一念にあつたのである。

維新以來未だこゝに五六十年、僅かに半世紀を経たに過ぎないのであるから、破壊後の建設——換言すれば、この時代の新思想の爛熟——をまだ見ない事は、いつの革新を見てもその例のある事で、思ふに今後の五十年間こそ新しき日本の建設が眞に行はれる時期であらう。とはいへ破壊の中にも建設の準備は急がれつゝある。精神文明は物質文明に後れるが常で、今日までの所は泰西文物の輸入に殆どある限りの力を注いで来たのであるから、この模倣の後に心靈界の要求が眞面目に起つて来るであらう。

二、新文學

これは勿論西洋文學の翻譯にはじまつた。而してその作品は泰西の文學論に刺戟されたものが多い。そのはじめ文壇に起つて、先づ泰西の文明を紹介した者は、福澤諭吉であらう。その平明暢達の文は、決して不用意の間に生れたのではない。漢文調を打破して、文語と口語との調和をはかり、西洋事情を紹介して、獨立自尊、自由平等

を鼓吹した事は、その文章上の功績と共に、純粹な文學論ではないが、先づ國民に新たな思想を傳へたのである。



紙表の「小説神髓」

新文學の第一歩に立つたものは、坪内逍遙の小説神髓である。これは、藝術は實用の奴隷たるべきものでは決してない、幕府以來の勸善懲惡主義は偽である、吾々は自然を目的として、ありの儘の客觀的寫實に進まねばならぬ、と高く叫んだのである。小説は教養ある士人の讀物としてな

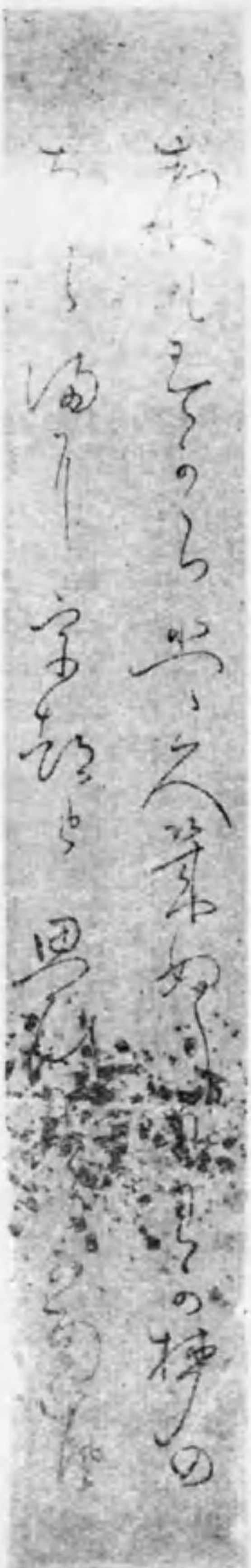
は價值あるものとせられるやうになつたのは、實に逍遙の主張が預つて力あつた。小説のみといはず、明治時代の文學が、この聲によつて位置を高め、高尚な作者を續出するに至つたのは事實であつて、この叫は明治大正新興の文學界に一新時期を劃すべき文學論であつた。

明治の末年に及んで、夏目漱石また文學論を著はした。當時の思想界は既に幼稚の域を脱して、哲學に宗教に東西の學理が論究せられて居た頃であつたから、泰西の文學論を基礎として、論理極めて明晰な此の論文は、囂々たる論戰の中に、一道の光明を與へた事は疑ない事である。このやうに、維新以來の文學は、一方に西洋文學の紹介翻譯が盛であると同時に、一方にはよくこれを咀嚼して斯界の光明となつた論文があつたので、愈々堅實な途を進む事が出来たのである。要するに、新文學の傾向は、元祿時代の自覺が一部の社會——平民——に限つたものであつたに反し、これは上下を問はず、廣く一般國民が自覺自任の上に立つといふ所にあるのであらう。

三、和歌

和歌が我が邦の文學史を通じて一貫した流れのあるものである事は、これまで述べ來つたことによつて見ても明らかであらう。維新の志士が、明日をも知らぬ境遇にあつて、なほ且つ悠々詠じた所のは實に和歌であつた。明治、否、今日の御代にも前代繼承の歌風は存するのである。これが所謂國粹保存の思想と深い關係を保つのであらう。即ち明治の歌壇は、先づ前時代の和歌の繼承によつてはじまつた。

明治天皇は允文允武、而も實に天成の歌人であらせられた。御一生中、事により、折にふれての御詠は、實に八萬首に上つたと承る。維新の後間もなく、即ち明治二年に既に歌道御用掛を設けられ、翌年から新年の歌御會始の歌を召され、七年には御會始の御題を賜つて、國民一般からの詠進を嘉納し給うた。これが現今の宮内省の御歌所となつたので、天曆の昔村上天皇の創設し給うた和歌所が復活したのである。



高崎正風筆蹟

御歌所の設立と共に、その所長に任せられたものは、前に八田知紀、後に高崎正風、その流の歌人としては税所敦子、小出榮等があつたが、いづれも皆桂園の流を汲むもので、此の外に海上胤平の如き剛健雄渾の調を主張して萬葉風を歌ふものもあつたが、明治當初の大勢はごこまでも古今調の御歌所風の傘下にあつた。

然るに極端な泰西文明謳歌に對する一般國民の自覺が起ると共に、泰西文藝の眞摯な研究があらはれ、これに刺戟せられて、こゝに歌壇にも革新の機運が生ずるに至つた。その第一線に立つたのは落合直文である。直文は明治二十五年淺香社を組織して新進氣鋭の青年を集め、題材、表現、共に舊套を脱して清新なる歌を詠むにつとめ

た。しかし直文その人の詠は、未だ全く舊殻を脱するを得なかつたのであるけれども、新しい歌の端緒を開いた功は、特筆に値するのである。社中の歌人に與謝野鐵幹、尾上柴舟、金子薫園があるが、中に鐵幹は男性的な詠を以て立ち、三十二年には新詩社を興して雑誌「明星」を發刊し、舊來の傳統を破つて清新にして情熱に富んだ詠歌を以て一時を風靡した。新詩社から出た歌人には、女流に與謝野品子がある。

以上、落合直文の系統を受けたものとは全然別に、矢張り歌壇の革新を標榜して立つたものに佐々木信綱と正岡子規とがある。佐々木信綱は漸進の態度を執つて、新體を採ると共に舊體も亦これを存し、穩健の態度を以て進むにつとめた。これを竹柏園派と稱し雑誌「心の花」によつてその主張を廣めた。

正岡子規は俳壇の天才、その俳界革新の餘勢を以て歌界の一方に立ち、萬葉調を標榜して竹の里人の名を以て盛に道勁の詠を出し、その死後は門下の伊藤左千夫、長塚節などが雑誌「馬酔木」を興して主義の宣傳につとめた。かくの如く三派鼎立の姿を

なしたが、いづれも舊套を破る點に於ては相通じ、舊派に對して新派と總稱し、また從來和歌と稱し來つた詞に對して、特に短歌の詞を用ゐるに至つた。

右に述べたうち特に注意すべきは與謝野品子である。その奔放な熱情と豊富な空想とは、自由な表現と相俟つて絢爛な新調をなし、殊にその大膽な戀愛の詠に至つては當時の歌壇も亦一般も寧ろ驚異の眼をみはつた。即ち浪漫主義の流行した世相とよく一致して、その名を成したのである。しかしながら、情熱の極、奇矯に過ぎ、更に往々不可解の詠が現れる風のあつた事もある。

此の頃から、一般文壇に於ける自然主義の勃興に伴ひ、これに刺戟せられた結果か、空想を排して現實を尊び、實感そのものを詠するといふ風が生れて、特に當時の少壯歌人の間に盛になつた。柴舟門の若山牧水、前田夕暮、明星派の石川啄木、北原白秋、蕪門の土岐哀果などがその代表歌人であつて、各特徴ある作風を示すに至つた。當時歌壇の二大勢力となつたのは、雜誌「創作」による牧水と、「ザンボア」による白秋と

で、牧水は自然を歌ふに優り、白秋は都會情緒を詠するにすぐれた。

子規によつて唱道せられ、左千夫によつて繼承せられた萬葉風の詠は、近來雜誌「アララギ」によつて、島木赤彦、齋藤茂吉を出し、漸く歌壇の中心勢力に進まうとした。この他幾多の新派歌人は、社を結び或は獨立して、常に新しき調を詠じて居る。然し全國を通じて新舊派歌人の數を問へば、舊派のそれは新派に對して遙かに多いといふ事である。

四、俳句

前代末期に墮落俗了した俳句は、更に衰微の状態を以て明治時代に及び、たゞ月並的のものに空しく命脈を保ち續けてゐたに過ぎなかつたのであるが、此の趨勢は正岡子規の出現によつて破られた。

子規ははじめ帝大の文科に學び、中途退學して塾居専ら文藝の革新に心神を碎き、まづ明治二十六年、日本新聞紙上に「芭蕉雜談」を連載して俳句革正の第一聲を擧



正岡子規筆蹟

げた。これ實に斯界青天の霹靂で、芭蕉に對する俳壇の盲目的信仰は、これによつて破られ、新しい見方によつて新しい思想を吟すべき機が、來たのである。

子規の研究は、まづ芭蕉に入り、蕪村に及び、從來芭蕉のそれに比して殆ど知られてゐなかつた蕪村を稱揚して天明調への復歸を提唱した。その作句上の主張は、自己の小主觀を捨て、眼前にある大自然、人事世相を素直に直視して、これを正しく藝術的に寫生せよといふにあつた。かくてその主張は日本新聞及び雑誌「ホトトギス」によつて天下に宣傳せられ、所謂「日本派」「ホトトギス派」と稱する一風を成したのである。

子規はその晩年、病牀以外一步も出る事は出来なかつたが、しかもなほ作句の氣力は衰へる事なく、その偉大なる統率力は門下に幾多の俊才を出した。そのうち最も名あるものに高濱虚子と河東碧梧桐がある。虚子は主觀的傾向を帶び、碧梧桐は客觀的傾向を示したが、自然主義の餘波は俳壇にも影響して、實感を主とし印象を重んずる風を生じ、碧梧桐によつて所謂新傾向の句が生れるに至つたのである。

この傾向は一時非常な勢で俳界を風靡し、更に大須賀乙字は雑誌「アカネ」、萩原井泉水は「層雲」によつてこれに應じた。けれどもこれらの主張は、主張としては是認せられつゝも、作句そのものゝ上ではなほ將來に問題を殘して居る。

子規が革新の聲を擧げた頃、また別に文壇の驍將尾崎紅葉の率ゐる紫吟社があり、角田竹冷、戸川殘花の秋聲會があり、大野洒竹、佐々醒雪、藤井紫影、笹川臨風等の筑波會などがあつて日本派に對したが、現在は餘りその聲を聞かなくなつた。

五、新體詩

これは、この期に至つて、はじめて歌の一體として創められた形式で、外山、山、矢田部尙今、井上巽軒などの新しい試みである。その詩集を「新體詩抄」といひ、翻譯、創作、へすて十九篇から成つて居る。

これは、この頃——明治十五年——は舊文學の名残がまだ勢力を墜さなかつた爲でもあらう、格調用語の雅醇を事とした歌人、又は國學者の仲間悦ばれず、又一般からも、聲調の新に過ぎて卑しいといふ事と、用語があまり自由で蕪雜な事を貶されて一時顧みられなかつた風がある。しかしながら、もと此の運動は、從來和歌の簡單な形式ばかりを以て歌調と考へて來た風潮に慨して起つたのであるから、社會の自然の要求は、その後かうした長形の歌詞を求めることになり、ひいては後に榮えるに至つた抒情詩の源泉をなしたものであつて、その意味から云へば、「新體詩抄」は實に詩壇の曉鐘と云ふべきものである。

次いで明治二十年代になつてからは、中西梅花、森鷗外、北村透谷があり、また落

合直文、山田美妙、尾崎紅葉なども吟詠を發表して、いろ／＼の形式と變遷とを見せたが、要するに詩としては未だ全く圓熟期に入るに至らなかつた。この後を承けて新詩壇に雄飛し一般の歡迎を受けたものに島崎藤村がある。藤村の詩は主觀的抒情的の作風で、その「若菜集」に自然と戀愛とを歌ひ「一葉集」「夏草」に西歐情緒に充ちた醇雅な格調を出し、「落梅集」に至つて現實を洞觀した人生詩をあらはして居る。

この頃また別に、西詩の翻譯紹介に盡した平田秃木、戸川秋骨、上田柳村がある。柳村の該博な學殖は、その豊かな詞藻と相俟つて當時の詩壇に大なる刺戟を與へた。猶また擬古派に鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月があつた。

この時藤村に對峙して詩壇の一面に霸を稱へたものに土井晚翠がある。晚翠は、感傷的女性的に陥らうする當時の詩界に向つて、豪快な男性的格調の詩を高唱し、遒勁雄渾な風格を創め、「天地有情」「曉鐘」などの著は一時特に青年の間に愛吟せられた。藤村、晚翠二巨星の去つた後を承けて立つたものに抒情詩人薄田泣菫、蒲原有明の

二者があり、その他岩野泡鳴、高安月郊、兒玉花外があつたが、この頃歌壇俳壇と同じく自然主義の勃興につれて自由な形式を唱道するものが現はれ、用語の如きも口語を以てすべしと唱へ、官能的利那的なのが行はれるに至つた。この頃の詩人としては、三木露風、山村暮鳥、川路柳虹があり、最も傑出したものに北原白秋があつた。かくして自由な散文詩の創始を見、民謡、童謡、口語詩などが現はれ、今や詩壇は國民と結びついて根本的の革新期に向ひつゝある。

六、劇文學

幕末から續いて滿都の人氣を集めてゐたものは芝居である。市川團十郎、尾上菊五郎などの名優が舞臺に立つて、或は舊劇に或に新劇にその妙技を演じたとき、その裏面に於て靜かにそれらの脚本を草した最初の人は、前代末期から盛名を博してゐた河竹默阿彌(古河)であつた。そのはじめの間は、多く盜俠を主題としたものを書いたがこれは例の勸懲主義にとらはれて居るもので、何等清新の氣風をあらはさず、眞の藝

術味には乏しかつたのである。しかしながら默阿彌の作も、新しくなるに従つて舊時代の風を脱し、「梅雨小袖昔八丈」「島衛月白浪」「四千兩小判梅葉」のやうな所謂明治の世話物を書くやうになつた。

當時の戯曲界は混沌たるものであつたが、明治十六年の頃、坪内逍遙が、シエークスピアの「ジュリアス、シーザー」を淨瑠璃體に翻譯して、「自由太刀餘波銳鋒」と題したものを出すに及んで、當時朝野の視目を集めた。これは西洋脚本が我が邦に紹介せられた最初のものであつたからである。

從來芝居といふものは、中流以下の人の見物すべきものとなつて居たのであるが、この頃から、歐化熱の高まつた影響として、西洋通の人々によつて演劇は高尚な娛樂である事が説かれ、在來の夢幻劇は新しい觀劇家の満足する所とならず、遂に明治十九年には末松青萍の主唱で、伊藤、大隈以下、朝野の名士の参加の下に演劇改良會が組織せられ、舊來の脚本を改良して寫實的演劇を主張したのであるが、幾もなくしてこ

れも瓦解し、次で坪内逍遙、依田學海、森鷗外、尾崎紅葉など、當時知名の文士及び俳優も之に加つて演劇協會を起し、穩健な改良に進んで性格描寫の自然を説いた。依田學海はこの改良論に乗じて、舊劇の猥雜、殘忍、野鄙を棄て、不自然に陥らない寫實的の筆を執り、福地櫻痴も此の頃政論の筆を止めて専ら史劇の作に力を盡し、急激な改革の非を悟つて、團十郎の活歴的腹藝の趣味と共に、多少西洋の性格劇を採り入れて、漸進の歩を運んだのである。これが東京人の趣向に投じて、開幕毎にわれるばかりの盛況を呈した。

此の頃、坪内逍遙は「早稻田文學」誌上に「夢幻劇論」を發表して、近松以後當時に至るまでの舊劇を評論して、泰西の性格劇を鼓吹し、演劇の向ふべきところを説いた、のみならず自己の主張を具體化したものとして「桐一葉」及び「牧の方」を發表した。かくして歌舞伎から出た史劇が作られると同時に、一方ではこゝに新派劇が生れるに至つた。

これは、そのはじめ書生劇——壯士芝居——と貶されて居たのであるが、漸次洗練を加へて來て、殊に舊派では名優相次いで物故し、やゝ凋落の色あるに乘じ、鷗外の新作「玉匣兩浦島」を上演して劇界に多大の影響を與へ、且つまた此の頃から新しい小説を脚色して上演する事が流行しはじめたので、その結果新劇は舊劇と相對抗するの勢をなすに至つた。この形勢に加へて、能樂の復活があり、西洋音樂の輸入があり、それが延いては逍遙の樂劇——舞踊劇——の提唱となつて、「新曲浦島」などが發表せられ、次いで三十九年には文藝協會の組織を見るに至つた。而してこの頃また他に新劇團が續出し、いづれも泰西の近代劇を取入れ、殊に社會劇の普及に力をそゝいだ。この趨勢はやがて劇文學の研究、劇作家の出現を見、史劇に、宗教劇に、或は泰西名篇の翻譯に、わが劇界を刺戟すること尠くなかつた。

かくして新劇は今日既に整然たる體を具へ、その生命を將來に囑目せられて居る。殊に帝國劇場の設立は斯界に一新時期を劃したもので、これにあつて以來、西洋その

まゝの演劇も自由に上場せられ、外人の來つて眼のあたりにもそのまゝの劇を演じ、或は歌劇に音樂に、明治以來論せられ、紹介せられたものを、直接に賞鑑し得るやうになつた。將來の斯界は發展の途をこゝに見出すことであらう。

七、小説

維新後のしばらくは、憲法發布、國會開設と、世の中に論せられた問題は、すべて政治であつた。即ち國民は急激の變動に瞬く間もなく、不知不識の間に政治の趣味に奔つたのである。かくして政治家は文筆を以て、政治趣味の普及をはかり、その結果として所謂政治小説の流行を見るに至つたのも、皆これ時代の然らしめた所である。

當時の流行語は「自由」といふ詞であつた。「自由亭」「自由餅」「自由丸」などあらゆる方面にこれが用ゐられたが、これは疑もなく佛國革命の思想が舶來せられたものであつて、中井兆民の譯したルソーの「民約論」は一般の讀書界に歡迎せられた。

殊に明治十年後は新聞紙の刊行が、種類も部數も非常な増加を見て、民間の言論を代表し、國民の輿望を負うて、刻下の政治に容喙するといふ有様であつたから、これに連載せられる小説の如きも、自然尊王攘夷一派の軋轢とか、佛國の革命運動とか、露國の虛無黨の陰謀とか、さうした血腥いものを材料として、悉く自由民權の輿論を沸騰せしめるものであつた。即ちこの頃のものとしては、柴東海散士の「佳人の奇遇」矢野龍溪の「經國美談」末廣鐵腸の「雪中梅」「花間鶯」須藤南翠の「綠簑談」「新粧の佳人」などが、その主なもので、外國の政治運動を中心にして、亡國の志士や、新興國の勇士を描いたものが多く、その盛況は幕末殘存の文學者をして、一時全く閉塞せしめた程で、假名垣魯文の如きは、あれどもなきが如き有様であつた。

これらの政治小説の特長は、そのすべてを通じて、主人公となるものゝ行動よりも、その言論の方が重んぜられて居る傾向で、これは要するに主人公そのものを通じて作者の政治的意見を述べるのが眼目であつたのである。即ち政治小説は、歴史的意義に

於てその價值があるのみで、作品即ち藝術品としてはさほご云ふに足りないものである。

この頃また翻譯小説が盛に行はれた。これとても文藝作品として價值を認めて譯出されたものではなく、全く政治思想に呼應したもので、前述の政治小説と同軌にある政論の副産物たるに過ぎない。これには、リットンの原著織田純一郎譯の「花柳春話」、ヂスレリーの原著關直彦譯の「春鶯囀」、リットンの原著坪内逍遙譯の「慨世士傳」同じく藤田鳴鶴譯の「繫思談」などがある。かうした状態で小説界は明治二十年代の新文學勃興期に入らうとしたのであるが、その最後のものとして、ベルサ・クレー原著末松青萍譯の「谷間の姫百合」がある、これは在來のものと同異つて、文體も漢文直譯の生硬を排し、會話にはすべて言文一致體を用ゐてゐる。

かくて政治小説が一世を風靡してゐた時に、新文學の曉鐘として出現したものが坪内逍遙の「小説神髓」でその主張を具體的に示したものが、次いで出た「當世書生氣

質」である。これは一言にしていへば新舊思想衝突のたゞ中にあつて、明治の新制度新教育にはぐくまれた所謂書生なるものが、血氣に、大膽に、自由に行動する社會の多



方面を描き、うちに諷刺の筆を交へたものである。この一篇が發表せられた當時は褒貶の聲四方に起り、評論界は一時に沸騰した有様であつたが、要するに善玉悪玉の舊型を脱したこの新體は、この後の文壇を壓して今日の成功を

見るに至つたといふ事が出来る。即ちこれによつて文壇は政治小説から寫實小説に移つた。

二葉亭四迷の「浮雲」は、更に逍遙のこの主張を裏書するもので、これこそ眞に新時代を模寫した所謂寫實小説であつた。篇中に活動する處女の心理、青年の情緒、いづれも當代そのものを寫して、新人を悦ばしめたものであるが、「浮雲」の特長はこれのみではなかつた。實に其の文體が作者獨特の創意になるもので、これこそ明治時代の大産物言文一致の魁をなしたものである。この點を以て二葉亭の名は恐らく千載に不朽のものとなるであらう。四迷はその後永らく文壇に筆を絶つたが、明治の末年に再び起つてツルゲネーフなどのロシア文學を紹介し、創作には「其面影」「平凡」などを綴つて當時の文界を賑はせた。

二葉亭の出た頃、西洋文明謳歌の反動として起つた國粹保存論は、小説界にも及んで、徳川時代の小説、殊に西鶴の研究が起り、その影響を受けて文壇の一方に新旗幟を樹てたものに、尾崎紅葉、山田美妙齋、石橋思案、丸岡九華などの硯友社一派がある。そしてこれらの少壯文學者が集つて、「我樂多文庫」を創刊した事はこれまた忘る

紙表の庫文多樂我





べからざるもので、紅葉は二十二年に色懺悔を出して一躍文壇に立ち、美妙は胡蝶を出してこれと並び、當年の傑作と稱せられた。紅葉の作品には、色懺悔の外に「伽羅枕」「二人女房」「三人妻」「多情多恨」「金色夜刀」などの有名である。そのはじめは唯美主義を奉じて描くところ皮相に止まつて居たが漸次進んで人生派に入らうとする風を生じ、心理描寫の如きも微細な點にまで妙味をあらはして、所謂心理小説への傾向をその寫實的文詞の中に既にあらはして居る點が認められる。

この頃、紅葉と並び稱せられたものに、幸

田露伴がある。露伴は「風流佛」を出してから名聲一時に高く、次で「一口劍」「血紅星」「五重塔」などの傑作を發表して、忽ち文壇の重鎮となつた。露伴もまた西鶴に私淑した一人であるが、紅葉の艶麗な筆致に對して、あくまでも剛毅な性格を表現し、紅葉の寫實主義に對し、佛敎主義、理想主義を以て進み、自己の主觀を以て構想した作品を出した。

この外に、櫻庭篁村の文章は當時元祿耽美の聲に應じたもので、八文字屋一流の輕妙な諷刺文は「當世商人氣質」に見られ、齋藤綠雨の「あられ酒」は當時の儕輩に見られぬ獨特奇抜な彼の性行を窺ふ事が出來、矢崎嵯峨の舍の文は、天真流露、熱烈な哀觀を呼ぶものである。こゝにまた翻譯家として並ぶものなき森鷗外がある。獨乙語學の素養の深かつた鷗外は、天成の才筆を振うて各種の文學を紹介し、一方創作家として、はた學究的評論家として、大正の世にまで文壇の重將であつた。「水沫集」「舞姫」「うたかたの記」「文づかひ」は當時の作品である。

紅葉露伴を迎へた小説界は、幾もなくしてその題材の單調なのに倦み、こゝに變化を求めて、黒岩涙香等の探偵小説、村上浪六等の俠客小説、村井弦齋、渡邊霞亭、塚原澁柿園などの歴史傳奇小説に迎合して、その複雑な脚色を悦んだが、時恰も日清の役を経て、此の傾向は更に深く進み、その結果として悲惨な運命と現實の懊惱とは描いた所謂觀念小説といふなものが生れた。泉鏡花、川上眉山、廣津柳浪などは、この派の錚々たるもの。これ前期の現實描寫から更に一步進んだもので、現實に接觸しようとする心持が閃いたのである。鏡花の「夜行巡査」「外科室」柳浪の「黒蜥蜴」「今戸心中」、眉山の「書記官」「うらおもて」はその代表的のものである。

この間にあつて女流作家として立つたものに樋口一葉がある。その文壇的生涯は二十五歳から二十九歳までの僅か五箇年であつたが、その筆になる心理小説は、悉く人生苦を嘗め來つた自己體驗の告白ともいふべきもので、同性の上に深い同情の涙をそゝいでゐる。「たけくらべ」「濁江」「十三夜」「われから」はその傑作。

この外、當時の新進作家には心理小説に小栗風葉、後藤宙外、があり、家庭小説に徳宮蘆花、柳川春葉、菊池幽芳があり、社會小説に木下尚江があつて、蘆花の「不如歸」幽芳の「己が罪」「乳姉妹」などは非常な歡迎を受けた。而してこれらの作品が、藝術的價値に於て低級であるとの誹はともかくも、社會の讀書眼を向上せしめた事は注意すべき事である。こゝに又、寫實主義を標榜して立つたものに小杉天外がある。佛國の實驗小説家ゾラの影響を受けたもので、その作品に「初姿」「魔風戀風」「コブシ」などがある。永井荷風また「地獄の花」を出して自然主義的傾向を示し、風葉も「青春」によつてこれを唱道する所があつた。

さて、近世科學の發達と實證的哲學の影響とは、茲に人生の事實を如實に描寫して、純客觀の表現をこる自然主義的な文學が生れるに至つた。二十年代の寫實小説は單に外見的皮相を捕へたに過ぎなかつたが、これは人生の内面に沈潜して、その表裏をありのまゝに現さうとするのであつた。而してその作者には國木田獨步、島崎藤村、田

山花袋をはじめ正宗白鳥、徳田秋聲などがあつた。獨歩の「牛肉と馬鈴薯」「運命論者」藤村の「破戒」「春」「家」花袋の「蒲團」「生」白鳥の「泥人形」秋聲の「徴」小栗風葉の「戀ざめ」などはその代表的作品である。

自然主義全盛の時に於て、超然別に一家を立てたものに夏目漱石がある。漱石は英文學に精通し、漢學に長じ、更に禪味を解した人、その文は俳句から出た寫生文で、それに禪的洒脱と自然幽玄の妙味を備へたもの、而してその深遠な哲理批判と、細緻を極めた心理解剖と、清新なユーモアに富んだ筆致とは、稀に見る所で、明治から大正にかけて斯界に光彩を放つた文豪である。これを餘裕派と稱した。作品には「吾輩は猫である」「虞美人草」「草枕」「坊ちゃん」「三四郎」「それから」「門」「行人」、また未完成の絶筆「明暗」がある。

自然主義の影響は單に小説界のみならず、當時のあらゆる文學に及んだのであるが、元來此の派の作品は、その多くが人生の暗黒方面のみを寫して來たので、こゝに

その缺陷があつたのである。即ちその描寫する人生味は平板に流れ、單調になり、漸くにして停滯の姿となつて來た。かくして明治の末年には新浪漫主義が起つてこれに代り、次いで新理想主義、新現實主義の勃興を見るに至つた。

大正初期の小説界を代表するものに武者小路實篤、志賀直哉、有島武郎、長與善郎などの「白樺」一派が生れた。この一派は所謂「人道主義」を標榜するもの、これが一方にはキリスト教思想の崛起をうながし、更に佛教思想の復活を來し、又更に傳統主義の思潮を喚起してわが邦古文學の研究となつた。此の間にあつて、前期自然主義派の作者として立つた將星田山花袋、島崎藤村、また幾分の轉化を示し、更に新進に芥川龍之介、菊地寛、久米正雄、谷崎潤一郎、長田幹彦、小山内薫などがあり、何れも各種の名作を出して新傾向を生まんとする有様は、將來大いに矚目すべきものがある。

x x x x x

要するに、文學は時代の反映である。我が邦の現代はその文明の基礎益々強固に、その進運愈々堅實に、他日の圓滿渾成に向つて一步一步を進めつゝある。國家の整頓と共に、國民には文藝鑑賞の餘裕を生ずるであらう。維新の混乱は既に昔語となつて、現代の人に切りに回顧せられる。

然し乍ら一方新思想の移入は一時も止む時なく、而も世界は過般の大戦争を以て思想界に異常の變化を齎しめた。革命の頻出に政體國體を變へた國家も尠くない。これらの我が邦に及ぼす影響の大は、誰もが十分に肯かれる所であり、同時に頗る戒心用意の必要を感せしめられる。この時に於ける吾人の準備と對策とは、實に吾々日本人が如何にして今日に至つたかを知つて置くにある。

吾人はこゝに二千年來の文學の變遷と發達とを通覽した。文學が思想表現の最大なるものである以上、國文學史は吾等が祖先の信じ行ひ來つた經過を最も正確に吾等に傳ふるものである。こゝに一步をあやまらば邦家の危殆いふべからざるものがあるけ

れども、若し幸にして將來わが日本の文明が東西の粹を蒐め鬱然たる大帝國を形成する事が出来るならば、この國の文學の前途もまた多幸と云ふべきである。否我等は是非ともこゝに奮發精進その實現に向つて努力せねばならぬのである。

小さい國文學史終

索引

一、語の配列はすべて發音順による。
 二、一字さげの語はそれらの作例である。

〔あ〕

淺井了意	……	二七〇	遊學往來	……	一七八
淺香社	……	二九六	家	……	二七八
朝比奈巡鳥記	……	二七七	家隆(藤原)	……	二五六・二五七
東鑑	……	二五〇	家隆(和歌)	……	二五八
吾嬬路記	……	二五〇	伊賀越道中雙六	……	二三四
あづまなまり	……	二八八	伊賀越乘掛合羽	……	二三四
吾妻問答	……	二六五	十六夜日記	……	二八二・二八三
阿佛尼	……	二八二・二八三	十六夜日記(文)	……	二八三
油糟	……	二六六	石川啄木	……	二九八
油屋お染袂の白綾	……	二六六	石川未得	……	二九九
天野桃隣	……	二三四	石橋思案	……	二九二
雨森芳洲	……	二三八	伊勢	……	二九七
新井白石	……	二〇八	伊勢(和歌)	……	二〇七
荒木田守武	……	二〇八・二〇九	異制庭調往來	……	二七八
あられ酒	……	二二五	伊勢島宮内	……	二九三
右島武郎	……	二二九			
在原滋春	……	二二三			
在原業平	……	九〇・九七・九八			
在原業平(和歌)	……	一〇〇			
髮庭篁村	……	二五五			
青本	……	二七四			
赤染衛門(和歌)	……	二二五			
赤本	……	二七四			
顯季(藤原)	……	二五九			
顯輔(藤原)	……	二五九			
秋夜長物語	……	一七七			
芥川龍之介	……	二二九			
朱樂菅江	……	二二〇			
朱樂菅江(狂歌)	……	二二〇			

あーあ・い

伊勢物語	100	井上播磨掾	333・337	浮世床	364
伊勢物語大意	269	井原西鶴	27・271	浮世風呂	364
一茶(俳諧寺)	334・337	今鏡	140・143	浮世物語	370
一條冬良	201	今戸心中	326	うけらが花	377
一谷嫩軍記	334	今様	89・94	右大將道綱母	380
一葉集	303	今様	95	うたかたの記	382
泉鏡花	326	今様二十四孝	273	宇治加賀掾	335・337
和泉式部	223	妹背山婦女庭訓	334	宇治拾遺物語	100・143
和泉式部(和歌)	224	色懺悔	322	宇治十帖	222
和泉式部日記	225	いろは文庫	283	宇治大納言物語	103
出雲國造神賀詞	22	岩田涼菟	333	氏文	406・478
出雲國造神賀詞(文)	23	岩野池鳴	304	宇津保物語	222
出雲風土記	26	因果物語	270	鶉衣	338
井手曙覽	223	印刷術	406	海上風平	396
井手曙覽(和歌)	224	上田秋成	267	うらおもて	397
伊藤左千夫	297	上田柳村	303	雲萍雜志	397
伊藤仁齋	308	浮雲	321	運命論者	398
伊藤東涯	309				
井上巽軒	322				

【え】

榮華物語	100	大隈言道(和歌)	225	奥儀抄	95
鄂曲	9	凡河内躬恒	50・104	奥の細道	27
江島其磧	275	凡河内躬恒(和歌)	16	小栗風葉	26
悦目抄	92	大島蓼太	22	フコト點	43
江戸文	306	大須賀乙字	101	尾崎紅葉	10・106・211
榎本其角	233	大伴黒主	90	小内山蕨	219
榎本其角(俳句)	233	大伴旅人(和歌)	23	小澤蘆庵	222
演劇文良會	305	大伴家持	40・58	小澤蘆庵(和歌)	224
		大伴家持(和歌)	59	小杉天外	221
		大野酒竹	302	お染久松色讀版	226
		太安麻呂	27	織田純一郎	20
		大葉子	22	落合直文	96・203
		大祓詞	22	落窪物語	222
		大祓詞後釋	266	樽智越人	223
		大町桂月	202	お伽草子	227・279
		大屋裏住	229	お伽婢子	270
		大淀二千風	233	尾上柴舟	227
		荻生徂徠	229	己が罪	227
		荻原井泉水	301	小野小町	90・104

【お・を】

えーお・を

小野小町(和歌)	一〇五	蜻蛉日記	一三〇	金子薫園	二九七
近焚柴の記	一五三	笠金持(和歌)	一三三	徹	三二八
女殺油地獄	二四七	鹿島紀行	三三三	鎌倉三代記	三三四
		加合白雄	三三三	鎌倉諸藝袖日記	三三三
		可笑記	三三〇	鎌倉比事	三三三
		住人の奇遇	三〇九	上方文學	三〇六
		荷田春滿	二〇・二五七	上島鬼貫	二二八
		荷田春滿(和歌)	二二一	鴨長明	一六八
		片假名	三三	鴨長明(和歌)	一六三
		語部	二	賀茂真淵	二〇・二二・二五八
		掛取魚彦	二二〇	賀茂真淵(和歌)	二二一
		掛取魚彦(和歌)	二二二	柄井川柳	三三二
		加藤枝直	二五八	我樂多文庫	三三二
		加藤曉臺	三三三	唐衣橋洲	三三九
		家道調	三三〇	唐衣橋洲(狂歌)	三三九
		河東碧梧桐	三〇一	鴉合職物語	一七七
		假名垣魯文	三〇九	花柳春話	三三〇
		假名字子	二六九	刈萱桑門筑紫標	三三四
		假名手本忠臣藏	三三四	河合會良	三三三

川上眉山	三六	鏡伊勢物語	三三	伽羅枕	三二四
河竹新七	三三	北島親房	二〇〇	檀園文集	三六八
河竹黙阿彌(古河)	三〇四	北原白秋	二九八・三〇四	狂歌	三三八
川路柳虹	三〇四	北村季吟	二二七・二六四	狂句	三三一
冠辭考	三三九	北村透谷	三〇三	狂言	一九七
菅茶山	三五六	義太夫節	二五三	狂言	一九七
閑田耕筆	二五六	木下幸文	二二三	京極家	一五九
閑田文章	二六七	木下幸文(和歌)	二二四	鳴鐘	三〇三
蒲原有明	三〇三	木下順菴	二〇八	京童	二七〇
		木下尙江	三二七	清輔	九三・一九九
		木下長嘯子	二二〇	金槐集	一六一
		紀貫之	九五・九七・一〇一	金々先生榮華夢	二三四
		紀貫之(和歌)	一〇三	琴後集	二六七
		紀友則	九五	琴後集(文)	二六八
		紀友則(和歌)	一〇七	近世畸人傳	三五六
		紀友則(和歌)	一〇七	近世說美少年錄	二七七
		黄表紙	二七四	公任(藤原)	九三・一一
		桐一葉	三〇六	公任(和歌)	一一三
		客衆肝照子	三三六	金平本	三三三
		脚本	三三五		

錦文流	三三五	群書類從	三六六
金門 山門	三三五	源氏物語玉の小櫛	三六六
金葉集	三〇九	源註拾遺	三六六
[く]		三同放言	三六六
草双紙	三三〇	源平盛衰記	三六二
草枕	三三八	元明天皇(和歌)	三六二
宮内卿(和歌)	一六五	親友社	三三三
宮内卿永經女	一八〇	戀川春町	三七四
國木田獨歩	三三七	戀ざめ	三三八
虞美人草	三三八	小出榮	三九六
熊谷女編笠	三三七	合巻	三八〇
熊谷直好	三三三	厚顔抄	三六四
熊谷直好(和歌)	三三四	口語詩	三〇四
熊澤蕃山	三〇八	後室色 編	三三三
久米正雄	三二九	好色一代男	三七一
黒岩涙香	三二六	好色一代女	三二三
黒蜥蜴	三二六	好色五人女	三三二
黒木	三二四	行人	三三八
源氏物語新釋	三六五	源氏物語玉の小櫛	三六六
源氏物語	一三三・一四八	源註拾遺	三六六
源氏物語湖月抄	三六五	三同放言	三六六
契沖(和歌)	三二一	源平盛衰記	三六二
外科室	三二六	元明天皇(和歌)	三六二
月琴堂	三三三	親友社	三三三
玄惠	一七八	戀川春町	三七四
兼好法師	一七一	戀ざめ	三三八
源氏物語	一三三・一四八	小出榮	三九六
源氏物語(文)	一三五	合巻	三八〇
源氏物語湖月抄	三六五	厚顔抄	三六四
源氏物語新釋	三六五	口語詩	三〇四
		後室色 編	三三三
		好色一代男	三七一
		好色一代女	三二三
		好色五人女	三三二
		行人	三三八

[け]

[こ]

[か]

幸田露伴	三三四	古史通	三五
古今集	九三・九五	古淨瑠璃	三三
古今集打聽	三六五	後撰集	九二・一〇八
古今集序(文)	三六	後醍醐天皇(和歌)	一六三
古今集遠鏡	二六六	五大力戀絨	三三三
古今著聞集	二〇〇	兒玉花外	三〇四
古今傳授	二〇九	胡蝶	三三三
古今餘材抄	二六四	滑稽文	二六三
昔の衣	一六	滑稽和合人	二六七
國學	二〇四	後藤宙外	三二六
國學の四大人	二六三	後鳥羽天皇(和歌)	一六三
國姓爺合戦	二四一・二四七	小西來山	二二八
國姓爺合戦(文)	二四二	碁盤太平記	二四七
小さかづき	二七〇	碁盤忠信	三三六
後拾遺集	一〇八	コブシ	三二七
五重塔	三二四	古文辭學	二〇九
古事記	一八・四〇・四三・七〇	金色夜叉	三三四
古事記(文)	七・七四	今昔物語	一四〇・一四三
古事記傳	二六一		
		西行法師	一五
		西行法師(和歌)	一七
		稅所敦子	二九六
		齋藤茂吉	二九九
		齋藤綠雨	三三五
		催馬樂	八九・九四
		催馬樂	九四
		采覽異言	三五
		櫻井丹波少掾	三三三
		櫻井梅室	三三四
		櫻田治助	三三六
		狭衣物語	一三
		笹川臨風	三〇一
		佐々木信綱	二九一
		佐々木醒雪	三〇一
		泊泊舎文集	三六
		薩摩太夫淨雲	三三

讚岐典侍	二五〇	拾遺愚草	二五七	師範家	二五八
讚岐典侍日記	二五〇	十三夜	二五六	島木赤彦	二五九
實朝(源)	二六〇	秋聲會	二〇一	鳥崎藤村	二〇二・二〇三
實朝(和歌)	二六一	鹽井雨江	二〇三	島衛月白浪	二〇五
更科日記	二六〇・二六四	仕懸文庫	二七六	清水濱臣	二六八
更科日記(文)	二六五	志賀直哉	二二九	下河邊長流	二二〇・二六三
山家集	二六六	鹿都部眞顔	二二九	下河邊長流(和歌)	二二一
三鏡	二〇一	鹿都部眞顔(狂歌)	二三〇	白樺	二二九
三十石體始	二五五	式子内親王(和歌)	二六三	釋心敬	二六五
三四郎	二三八	式亭三馬	二八三	寂蓮法師(和歌)	二六五
三代集	二〇八	紫吟社	二〇一	車輿考	二五一
山東京傳	二七四	四千兩小判梅葉	二〇五	洒落本	二七四
三七全傳南柯夢	二七七	時代物	二七七	自由太刀餘波鋭鋒	二〇五
三人吉三廓初買	二六六	志田野坡	二二二	朱子學	二〇七
三人妻	二三四	慈鎮和歌	二六四	俊寛僧都鳥物語	二七七
		十調抄	二〇〇	春鶯囀	二二〇
		十返舎一九	二六四	春色梅曆	二八三
		持統天皇(和歌)	二六一	俊成	二二〇・二五九
		柴東海散士	二〇九	俊成(和歌)	二二二
詞花集	二〇九				
拾遺集	二一九				

〔し〕

常山紀談	二五六	神代文字	二〇〇	炭太紙	二二五
精進魚類物語	二七七	心中二腹帶	二〇四	隅田春妓女容性	二二五
小説神髓	二九三・三〇〇	心中宵庚申	二〇七	住吉物語	二二三
消息文	二七八	神皇正統記	二〇〇	駿臺雜話	二五四
正風	二二二	神靈矢口渡	二三四	駿臺雜話(文)	二五五
淨瑠璃	二二二	神武天皇(和歌)	二二七		
淨瑠璃十二段草子	一八〇				
初學訓	二五〇				
書記官	二二六	末廣鐵腸	二〇九	生	二二八
蜀山人	二二九・二三八	末松青萍	二〇〇・二二〇	勢語臆斷	二六四
如偏子	二二〇	菅原孝標女	二二三・二三四	清少納言	二八八・二六六
新曲浦島	二〇七	菅原傳授手習鑑	二三四	清少納言(和歌)	二二五
新古今集	二五四	菅原道眞(和歌)	二〇六	青春	二二七
新十二月往來	二七八	杉山丹後掾	二二三	政治小説	二〇八
新詩社	二九七	須佐之男命	二二六	西洋紀聞	二五一
新粧の佳人	二〇九	須佐之男命(和歌)	二二五	瀬川如阜	二二六
新撰體腦	九三・一一一	鈴木正三	二七〇	關取千兩職	二三四
新體詩	二〇三	薄田泣蓮	二〇三	關直彦	二二〇
新體詩抄	二〇二	須藤南翠	二〇二	世間息子氣質	二七三
				世間娘氣質	二七三

〔す〕

〔せ〕

世間胸算用	二五三	素性法師	九七	瀧澤馬琴	二五六・二七六・二七七
世間用心記	二五三	曾根崎心中	二四・二四七	瀧亭鯉丈	二六七
雪中梅	三〇九	其面影	三二二	たけくらべ	二六
旋頭歌	九四	それから	三二八	武鳥羽衣	三〇三
世話物	二三七			竹田出雲	三三四
戦記文	一五・一八四			竹取物語	一一九
千載集	一〇八	題詠	九〇・九一	竹取物語(文)	三〇
宣命	四〇・六七	大塔宮曠鏝	二三四	竹本義太夫	二五三・二五七
宣命	六八	大貳三位	一三	太宰春臺	二〇九
川柳	三三二	太平記	一八五・一九一	田代松意	二二七
		鯛屋貞柳	三三九	多情多恨	三二四
		鯛屋貞柳(狂歌)	三三〇	多田南嶺	三三三
宗祇	一六五	高桑關更	三三	橋千蔭	二〇・二六七
僧通昭	九九・一〇四	高崎正風	三九六	橋千蔭(和歌)	一一七
僧通昭(和歌)	一〇五	高橋氏文	七六	橋成季	二〇〇
曾我會稽山	二四二・二四七	高濱虚子	三〇一	橋南谿	二五六
曾我物語	一七七	誰が身の上	二七〇	立花北枝	三三二
僧喜撰	九〇	高安月郊	三〇四	谷口蕪村(奥詠)	三三
信師練	一八	田川朗風	三三四	谷口蕪村(俳句)	三三六

【そ】

【た】

【て】

【と】

ちーつーてーと

谷崎潤一郎	三二九	勅撰集	三二	徒然草文段抄	二六四
谷間の姫百合	三二〇	千代女	三三三		
玉匣雨浦島	三〇七	椿説弓張月	二七七		
爲家	一五・一五九				
爲永春水	二八三				
田安宗武	二〇・二五八	通言總録	二七六	定家	一五四・一五六・一七六
田安宗武(和歌)	二二二	塚原澄柿園	三二六	定家(和歌)	一五七
田山花袋	三二七	筑波會	三〇一	定家御消息	一七六
丹後風土記	七六	菟玖波集	一六	庭訓往来	一七
男色大鑑	二二三	筑波問答	一六五	手柄岡持	三九・三八
檀林派	二二七	土井晩翠	三〇三	天地有情	三〇三
		堤中納言物語	二二三	天の網島	二四・二四七
		藤篋冊子	二六七	天の網島(文)	二四五
		角田竹冷	三〇一	天武天皇(和歌)	六一
		坪内逍遙	二九三・三〇五・三〇六	天明の六佛家	二二
		梅雨小袖昔八丈	三〇五		
		鶴屋南北	二二六	東雅	二五一
		徒然草	一七三	東海道名所記	二七〇
		徒然草(文)	一七三・一七四	東海道四谷怪談	二二六
				東關紀行	一八一

東西遊記	二五六	戸田茂睡	二二〇	奈河龜助	二五五
當世商人氣質	二五一	戸田茂睡(和歌)	二二一	中川喜雲	二七〇
當世書生氣質	二二〇	舍人親王	七〇	中島廣足	二六八
道中膝栗毛	二六四	外山、山	三〇三	長田幹彦	三二九
道中膝栗毛(文)	二六四	豐玉姫命	三六	長塚節	二九七
同文通考	二五一	豐玉姫命(和歌)	三六	中務大輔藤原信實女	一八〇
童話	三〇四	虎屋源太夫	二二	中務内侍日記	一八〇
戸川殘花	三〇一	虎屋長門掾	二二	中西梅花	三〇三
戸川秋骨	三〇三	とりかへばや物語	二二	長與善郎	三二九
土岐哀果	二九八	鳥部山物語	一七一	夏草	三〇三
徳川實記附録	二五六	泥人形	三二八	夏日成美	三二四
讀史餘論	二五一	[な]		夏日漱石	二九四・三二八
徳田秋聲	三二七	内藤丈草	三三	並木五瓶	二三五
徳富蘆花	三二七	内藤丈草(俳句)	三三	並木正三	二三五
土佐日記	三三〇	永井荷風	三二七	並木千柳	二三四
土佐日記(文)	三三一	中井兆民	三〇八	成田若虬	二三四
新年祭(祝詞)	三三	半井卜養	三三九	成島司直	二五六
俊頼(源)	九三・一一	中江藤樹	二〇八	鳴門中將物語	一七六
俊頼(和歌)	一一三			南總里見八犬傳	二七七

南總里見八犬傳(文)……………二七六

[に]

濁江	三二六
西澤一風	三三四・三三三
西山宗因	二二七
西山宗因(俳句)	二二八
修紫田舎源氏	二八〇
二十一代集	一五四
二條家	一五九
二條良基	一六五
日本一和布御神事	二七五
日本永代藏	二七三
日本書紀	一八〇・四二・七〇
日本書紀(文)	八〇
日本新永代藏	二七三
日本派	三〇〇
人情本	二八三

[ぬ]

額田女王(和歌)……………六二

[の]

野ざらし紀行	三二七
野々口立圃	三二七
祝詞	三六・四〇
祝詞考	二五九
俳諧	三二五
梅亭金鷲	二八七
俳文	三二七
破戒	三二八
博多小女郎波枕	三二七
芭蕉	三二九
芭蕉(俳句)	三三一
芭蕉雜談	三二九
八文字屋自笑	二七三

[は]

八文字屋本	二七三
鉢かつぎ	一七九
八代集	一〇八
初姿	三二七
八田知紀	二二二・二九六
服部南郭	一〇九
服部嵐雪	三三三
服部嵐雪(俳句)	三三五
花曆八笑人	二八七
塙保己一	二六六
濱松中納言物語	一一三
林鳳岡	一〇八
林羅山	一〇九・二八八
播磨風土記	七六
春	三二八
藩翰譜	二五二
藩翰譜(文)	二五三
伴蒿蹊	二五九・二六七

【ひ】

神田阿禮	七〇	風來山人	二六八	筆のすさび	二五六
樋口一葉	三二六	風流佛	三二四	武道傳來記	二七二
常陸帯	三五六	復古學派	三〇九	風土記	四〇・七五
常陸風土記	七六	福澤諭吉	三九三	風土記(文)	七七
一口劍	三三四	福地櫻痴	三〇六	蒲團	三二八
百人一首改觀抄	二六四	袋草子	九三	文づかひ	三二五
百人一首初學	二六五	武訓	三五〇	古河黙阿彌	三三六
百人一首初學	二六五	武家義理物語	二七三	文學論	三九四
百八町記	二七〇	富士谷成章	二五六	文訓	三三〇
平賀鳩溪	三三四	二葉亭四迷	三二一	文藝協會	三〇七
平假名	三三	二人女房	三二四	豊後風土記	七六
平賀元義	二二三	二人比丘尼	二七〇	文正草子	一七九
平賀元義(和歌)	二二四	藤井紫影	三〇一	文屋康秀	九〇
平田篤胤	三〇・三三	藤井高尙	二六七	平家物語	一八七
平田禿木	三〇三	藤田東湖	三二〇	平家物語(文)	一九〇
廣津柳浪	三二六	藤田鳴鶴	三二〇	平治物語	一八五
		藤原兼輔	三三	平凡	三二二
		藤原惺窩	二〇七・二四八	辨内侍日記	一八〇
		藤原基俊	九三		
		藤原良經(和歌)	二六二		

【ふ】

風俗文選……………三三八

【ほ】

方丈記	一六六
方丈記(文)	一七〇
北條圓水	二七三
北條時頼記	三三四
北邊隨筆	三五六
保元物語	一八五
保元物語(文)	一八五
細川幽齋	三〇九
發句	二二五
坊ちやん	三二八
不如歸	三二七
ホトトギス派	三〇〇
本朝軍器考	三五一
本朝智恵鑑	三三三
本朝二十四孝	三三四
本朝文鑑	三三八
翻譯小説	三三〇

【ま】

蜂姫	三三三
前田夕暮	二九八
嵐風戀風	三七七
牧の方	三〇六
枕草子	一三六
枕草子(文)	一三七
枕草子春曙抄	二六五
正岡子規	二九七・二九九
正宗白鳥	三七七
増鏡	三〇一
松平定信	二六七
松田文耕堂	三三四
松永貞徳	二二五
松永貞徳(俳句)	二二六
松の屋文集	二六七
丸岡九華	三三三
萬葉書	四八
萬葉考	三三九

【み】

萬葉代匠記	二六三
萬葉集	四〇・四六
萬葉拾穂抄	二六五
萬葉集玉の小琴	二六六
三浦櫻良	三三三
三重采女(和歌)	三九
御傘	二二六
三木露風	三〇四
亂屋三本鏡	二七三
水鏡	一四三・二〇一
源家長	一八一
源家長日記	一八一
源親行	一八一
源光行	一八一
水沫集	三二五
美濃の家づと	二六六
壬生忠岑	九五
壬生忠岑(和歌)	一〇七

妙竹林話七個人……………二六七
民話……………三〇四

村田春海(和歌)……………二二三
室鳩巢……………三〇八・三五四

安井大江丸……………三三四
安原貞室……………二二七
矢田部尙今……………三〇三
宿屋飯盛……………三三九・二八八

【む】

【め】

向井去來……………三三三
向井去來(俳句)……………三三五

明暗……………三三八
名家略傳……………三五六

柳川春葉……………三三七
宿屋飯盛(狂歌)……………三三〇

夢幻劇論……………三〇六

冥途の飛脚……………二四七

柳澤淇園……………二五六

武者小路實篤……………三二九

名譽仁政録……………三三六

やなぎだる(川柳)……………三三一

令子洞房……………二七六

本居宣長……………三二一・三六一

山岡元隣……………二七〇

夢想兵衛胡蝶物語……………二七七

本居宣長(和歌)……………三二三

山口素堂……………三三三

宗良親王(和歌)……………一六四

森鷗外……………三〇二・三〇六・三二五

山崎宗鑑……………二二五

無名抄……………九三

森川許六……………三三三

山崎美成……………二五六

村井弦齋……………三三六

門……………三三八

山田美妙……………三〇三・三二二

村井長庵巧破傘……………三三六

八百屋お七歌祭文……………三三四

大和物語……………二五〇

村上浪六……………三三六

夜行巡査……………三三六

大和物語直解……………三三三

紫式部……………八八・二二二・二五六

矢崎峯峨の舎……………三三五

山上憶良……………二五四

紫式部(和歌)……………二二五

好忠(會根)……………二二〇

良寛(和歌)……………二二四

紫式部日記……………三三〇・三三二

好忠(和歌)……………二二一

縁談……………三〇九

村田春海……………三二一・三六七

良經(藤原)……………二七六

冷泉家……………二五九

山上憶良(和歌)……………二五四

義經千本櫻……………三三四

歴朝詔詞解……………二六六

山部赤人……………四六・五六

吉原楊子……………二七六

連歌……………九四・一六四・二二五

山部赤人(和歌)……………五六

依田學海……………三〇六

連歌新式追加……………一六五

山村暮鳥……………三〇四

淀川……………二二六

六歌仙……………九〇・九七

鐘の權三重帷子……………二四七

讀本……………二七六

六條家……………一五九

湯淺常山……………二五六

四方のあか……………二八八

六々部集……………二八八

雄略天皇(和歌)……………二六

四方赤良……………三三九

和歌九品……………九三・一一一

夕霧阿波鳴渡……………二四七

四方赤良(狂歌)……………三三〇

和歌所……………九二

雪女五枚羽子板……………二四七

四方の留箱……………二八八

若菜集……………三〇三

誦曲……………一九五

落梅集……………三〇三

吾輩は猫である……………三八

陽明學……………二〇七

【ら】

横井也有……………三三三・三三八

【り】

毒詞……………三三・三六

柳亭種彦……………二八〇

【わ】

奥謝野晶子……………二九八

良寛……………三三

奥謝野鐵幹……………二九七

【れ】

ゆーよーらーりーれーろーわ

若山牧水	三九
和漢文操	三六
和漢朗詠集	三六
和字正濫抄	三六
渡邊霞亭	三六
我おもしろ	三六
われから	三六

わ

索引終

小さい國文學史

昭和二年五月一日修正印刷
昭和二年五月十日修正發行

著者權所有



定價金一圓五十錢

著者 植松安

東京市京橋區南橫町十八番地

發行者 大倉廣三郎

東京市京橋區築地二丁目卅番地

印刷者 川崎佐吉

東京市京橋區南橫町十八番地

發行所 廣文堂

振替東京四六八四
電話京橋五六六番

◇國語學の代表的最新副教科書

版六

小さい國語學

中判布製函入
二百二十二頁
金一圓五十錢
送料金十八錢

早稻田大學教授國語調査委員
安藤正次先生著

遠い祖先から傳へられて來た國民共有の貴い遺産である國語、吾等はこの遺産を繼承して完全に次代國民に引きつぐべき責任を有つてゐるばかりでなく、更に之を琢いてよりよきものとして傳へなければならぬ。本書は著者が此の見地から國語の本質を明らかにし、變遷をたづね、國語に對する十分な理解と運用を期する爲に書かれたものであつて、其の内容の性質、研究の部門、研究の方法、國語學の應用方面

第一章 國語學とは何か—國語學の性質、研究の部門、研究の方法、國語學の應用方面

第二章 言語と文學—言語と如何か、言語の習得、言語の社會的特質、世界の言語と日本語、言語と文字の關係、我が國に於ける漢字と假名

第三章 國語と方言—國語とは何か、文語と口語、國語の時代的區分、標準語と方言

第四章 國語の音韻—言語と音聲、發音器官の構造及び作用、國語の母音と子音、促音、拗音、音便、轉呼音、連濁、音の變化、國語のアクセント

第五章 國語の語詞—固有語と外來語、語詞の分化と複合、國語の品詞、意義の變化

第六章 國語學の發達—國語學史要(第一節—第五節まで省略)

等を包含し、我が國語の理解上、運用上須らく必讀すべき良書である。近來外國語濫用の結果、國語の本質を誤解する者多く、教育上誠に憂ふべき折柄敢て高等專門學校師範學校學生諸君の參考書として愛讀をすゝめる。

東南市橋 廣文堂 振替電話 東京橋 四六八番

◇哲學概論の代表的最新副教科書

版五

小さい哲學概論

中判布製函入
二百二十二頁
金一圓五十錢
送料金十八錢

山形高等學校教授文學士
佐藤直丸先生著

哲學とは何ぞや、此の問題は少くも自己の生活乃至人生に就いて何等かの疑惑と信念とを有する人に取つては實に必然の知的反省でなければならぬ。本書は此の問題に解決を與ふる爲に書かれたもので、哲學上の諸問題及び其の思想發展の概観を懇説し、最後にカントを中心として發展された現代の哲學並に現代主要の思潮たる文化哲學の内容を釋明したもので、其の要目は、

序 說—哲學概論の目的、哲學の概念、哲學と科學、哲學と宗教、哲學の分類、哲學の研究法

第一篇 認識論一般—知識の問題、知識哲學の概念、認識の本質(獨斷論、懷疑論、實證論、批評論)、認識の起源(合理論、經驗論、批判論)

第二篇 形而上學一般—實在の問題、形而上學の概念、實在の數量(單元論、多元論)、實在の本質(唯物論、二元論、同一論)機械論、目的論

第三篇 人生の問題—文化哲學一般、文化哲學の概念(倫理學、美學、歴史哲學、宗教哲學) 定命論、非定命論

であつて、而も著者が平素の哲學概論講義に於て學生に筆記の煩を省かしめることをも本書著作の一動機となつてゐるので、其の叙述は平易簡潔、初學者は之に依つて哲學の概念、諸問題、主潮、支潮を理解し、以て人生指導の根本原理を思索、體驗することが出来、師範學校上級生諸君の必讀をすゝめる。

東南市橋 廣文堂 振替電話 東京橋 四六八番

◇美學の代表的最新副教科書

新刊 小さい美學

中判布製函入
二百三十頁
金一圓五十錢
送料金十八錢

自我本質の無限の努力、無限の渴仰、無限の躍動、無限の進展の姿としての美の認識は人生に取つて重大な關係を有つ。本書は自我と絶對との融合を以てそのまゝ、實人生の理想となし、そこに美と久遠の生命とを認め、而して此の見地より美學の内容を叙述されたものであつて、その内容は

山形高等學校教授文學士 佐藤直丸先生著

- 第一章 美學とは何ぞや—美學の根據、美的價値
 - 第二章 美的經驗の構成—美の器としての感覺、統覺作用と美的感情、美的快感の意義、感情移入
 - 第三章 美の一般形式—多様の統一、分化的從屬と平衡、君主的從屬、形式原則と内容原則
 - 第四章 美的感情の種類—崇高の概念及び種類、苦惱と悲痛、滑稽と有情滑稽、其の他の美的感情
 - 第五章 美と人生—藝術の概観、美と人生との交渉
- であつて、幾多の例證を引き、數葉の挿圖を加へ、趣味あり含蓄ある流麗の筆にて簡明に平易に叙説せらるゝ所、知らず識らず其の所説に對して讀者を惹き付けずには置かない。苟くも倫理、宗教、哲學を研究せらるゝ學徒、藝術を愛好せらるゝ諸君並に高等專門學校諸君の愛讀を強要する。敢て必備をのぞむ。

東京市橋本町八番 廣文堂 振替電話 東京橋本 四六六五 四六六六 四六六八

終